序

「緑豊かな田園都市」として、近年発展を続ける小郡市は、同時に「歴史の宝庫」としても広く知られています。また、平成22年11月には、太宰府市から小郡市三沢へ九州歴史資料館が移転し、より多くのみなさまに、歴史に対する理解を深めていただくための環境が整ったと考えております。

本書では、平成9年の発掘調査によって所在が明らかになった「小板井屋敷遺跡」の隣接地における調査成果を報告いたします。今回の調査では、奈良時代と中～近世の集落に関連する資料が多数確認されました。

小板井区は、近世の参勤交代道が通っており、弥生時代の大集落である大板井遺跡や、律令期の推定御原郡衙である小郡遺跡にも近い、歴史的に重要な地域であったと想定される場所です。平成19年より市街化区域に編入され、ここ数年は宅地や商業施設の開発がめざましく進展しています。開発に伴う発掘調査も増加しており、埋蔵文化財保護への理解を促進していかなければなりません。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたっては新妻不動産、地元小板井区のみなさまに多大なるご理解とご協力をたまわりました。記して御礼申し上げます。

平成23年3月31日

小郡市教育委員会
教育長　清武　輝

凡　例

1. 本書は平成21年度に行った宅地開発事業に伴う「小板井屋敷遺跡2」の発掘調査報告書である。調査は、新妻不動産株式会社と受託契約を締結して実施した。
2. 現地調査の図面・写真撮影は、調査担当者・参加者が実施した。出土遺物の洗浄・接合は井上千代美・衛藤知嘉子・永倉さゆみの協力を得た。遺構の整図は上田が、遺物の実測・整図は白木千里が行い、遺物写真の撮影は文化財写真工房　岡紀久夫氏に委託した。
3. 本書で用いる北は座標北とし、図上の座標は国土座標（第2系）に拠る。
4. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準としている。
5. 本書で用いる遺構略号は、SB（掘立柱建物）、SC（竪穴建物）、SD（溝状遺構）、SK（土坑・井戸状遺構）、P（ピット）である。
6. 遺物実測図の縮尺は1／4、遺構実測図は1／40を基本とするが、一部は必要に応じて縮尺を変更している。
7. 本書に記載されている土色標記のうち、数値を記しているものについては、農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1990年度版を用いた。
8. 本調査に関わる出土遺物、写真、カラースライド、デジタルデータ等は、小郡市埋蔵文化財調査センターで保管している。広く活用されることを希望する。
9. 本書の執筆は調査担当者が行い（第1・2章；山崎、第3章（2）；上田、（3）山崎、第4章 上田・山崎）、編集は上田が行った。

本文目次

目次
序　凡例
第１章　調査の経過と組織 …… 1
（１）調査にいたる経緯
（２）調査の体制
（３）調査の経過
第２章　調査地の位置と環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 4
（１）Ａ区の遺構と遺物
（２）Ｂ区の遺構と遺物
第４章　調査成果のまとめ …… 33

挿図目次

第１図　調査区位置図……3
第２図　周辺遺跡分布図……3
第３図　Ａ区 SX10・SD04 出土土器 ……4
第４図　Ａ区 SK13・31・32・35・SX10 平・断面図……5
第５図　Ａ区 SK01・07・10・12・16・17 平・断面図…6
第６図　Ａ区土坑出土土器①……7
第７図　Ａ区 SK20・23 ～ 27 平・断面図 ……8
第８図　Ａ区 SK29・30・34・36 平・断面図 …… 10
第９図　Ａ区 SK30 出土土器 …… 11
第 10 図　Ａ区 SK37・38・40 平・断面図…… 12
第 11 図　Ａ区土坑出土土器② …… 12
第 12 図　Ａ区 SD02 出土土器 …… 13
第 13 図　Ａ区溝状遺構出土土器① …… 13
第 14 図　Ａ区 SK02・03・05・06・08 平・断面図 … 15
第 15 図　Ａ区 SK09・11・14・15・18・19 平・断面図 … 16
第 16 図　Ａ区 SK21・22・28・33 平・断面図 … 17
第 17 図　Ａ区土坑出土土器③ …… 18
第 18 図　Ａ区 SD10 平・断面図 …… 20
第 19 図　Ａ区溝状遺構出土土器② …… 21
第 20 図　Ａ区出土石器 …… 22
第 21 図　Ａ区出土銭貨 …… 23
第 22 図　Ｂ区 SC01 平・断面図 …… 24
第 23 図　Ｂ区 SC01 出土土器 …… 24
第 24 図　Ｂ区 SB01 平・断面図 …… 25
第 25 図　Ｂ区 SK01・02・03 平・断面図…… 27
第 26 図　Ｂ区 SK04・05 平・断面図 …… 28
第 27 図　Ｂ区 SK07 平・断面図 …… 29
第 28 図　Ｂ区 SK01・04・05・07・08、SD04 出土土器 … 30
第 29 図　Ｂ区 SD03 土層断面図 …… 31
第 30 図　Ｂ区 SD02・03 出土土器・石器 …… 31
第 31 図　Ｂ区 Pit 出土土器 …… 32

付図・表目次

付図　小板井屋敷遺跡２　遺構配置図（S=1/200）
第１表　A 区出土土器観察表① …… 34
第２表　A 区出土土器観察表② …… 35
第３表　B 区出土土器観察表 …… 35
第４表　出土石器観察表 …… 35

図 版 目 次

写真１　A 区土坑出土土器…… 18
写真２　A 区溝状遺構出土土器（陶器）…… 22
写真３　A 区溝状遺構出土土器（磁器）…… 22
図版１　A 区調査区全景（北から）
図版２－①　SK01 完掘状況（南から）
図版２－②　SK02 完掘状況（南から）
図版２－③　SK03 完掘状況（南西から）
図版２－④　SK06 完掘状況（西から）
図版２－⑤　SK07 完掘状況（北から）
図版２－⑥　SK08 完掘状況（北から）
図版２－⑦　SK09 完掘状況（北東から）
図版２－⑧　SK15 完掘状況（南から）
図版３－①　SK17 完掘状況（南から）
図版３－②　SK20 完掘状況（南から）
図版３－③　SK21・22 完掘状況（南西から）
図版３－④　SK23 完掘状況（北東から）
図版３－⑤　SK27 完掘状況（北東から）
図版３－⑥　SK29・37・38 完掘状況（南から）
図版３－⑦　SK30 完掘状況（西から）
図版３－⑧　SK35 完掘状況（西から）
図版４－①　SD04 完掘状況（西から）
図版４－②　SD08 完掘状況（南から）
図版４－③　SD05 完掘状況（南から）
図版４－④　SD09 完掘状況（北から）
図版４－⑤　SD10 東壁土層（南西から）
図版４－⑥　SD10 木杭検出状況（南から）
図版５－①　B 区全景（南東から）
図版５－②　B 区全景（西から）
図版５－③　B 区北全景（北西から）
図版６－①　B 区 SC01 土層断面（北西から）
図版６－②　B 区 SC01 床面検出状況（南西から）
図版６－③　B 区 SC01 カマド検出状況（北から）
図版６－④　B 区 SC01 貼床除去後（南西から）
図版６－⑤　B 区 SB01（北西から）
図版６－⑥　B 区 SB01 p1 土層断面（北西から）
図版６－⑦　B 区 SB01 p3 土層断面（北東から）
図版６－⑧　B 区 SB01 p4 土層断面（東から）
図版７－①　B 区 SB01 p5 土層断面（東から）
図版７－②　B 区 SK01 土層断面（南から）
図版７－③　B 区 SK01 完掘状況（東から）
図版７－④　B 区 SK01 完掘状況（南から）
図版７－⑤　B 区 SK02 土層断面（東から）
図版７－⑥　B 区 SK02 完掘状況（東から）
図版７－⑦　B 区 SK03 土層断面（北から）
図版７－⑧　B 区 SK04 土層断面（西から）
図版８－①　B 区 SK04 完掘状況（西から）
図版８－②　B 区 SK05 土層断面（北から）
図版８－③　B 区 SK05 完掘状況（北から）
図版８－④　B 区 SK07 土層断面（北から）
図版８－⑤　B 区 SK07 完掘状況（北から）
図版８－⑥　B 区 SD02 土層断面（東から）
図版８－⑦　B 区 SD03 土層断面（東から）
図版８－⑧　B 区調査風景
図版９　A 区出土遺物
図版 10　B 区出土遺物

第１章　調査の経過と組織

（1）調査にいたる経緯

小板井屋敷遺跡の調査は、小板井字屋敷・字屋形町地内に宅地造成が計画され、埋蔵文化財の有無についての照会があったことに端を発する（審査番号 09056）。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地小板井屋敷遺跡周辺に位置し、照会を受け、平成 21 年 12 月 15 日に試掘調査を行い、遺構が確認され、包蔵地が広がることが明らかとなった。

これにより、埋蔵文化財に関する協議を行い、協議の結果埋蔵文化財に影響を与える計画道路部分の 600 ㎡を調査対象とし、発掘調査を実施することになった。なお、調査は作業の工程上、A・B 区の2区に分けて行った。

（2）調査の体制

調査の体制は以下のとおりである。

［開発関係］　新妻不動産株式会社　代表取締役　新妻　昭徳
地権者　田中正隆
田中貞子

［調査関係］　小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部長　赤川芳春（平成 21 年度）
河原寿一郎（平成 22 年度）
文化財課　課長　田篭千代太
係長　片岡宏二
技師　上田　恵（A区担当）
山崎頼人（B区担当）
嘱託　坂井貴志
補助員　柿本　慈

（調査参加者）　阿南翔吾　黒瀬　明　朱雀聡一郎　田中安美子　田中賢二　田中　徹
長野智恵子　松田徳代　宮崎隆明　山本睦子

（3）調査の経過

A 区の調査は平成 22 年 1 月 12 日重機を使用して上部構造物・植樹を撤去したのち、表土剥ぎを開始した。13 日降雪のため作業中断、19 日表土剥ぎ完了。同日発掘作業員が入り、人力による遺構検出・掘削を開始した。調査区ではほぼ全域で東西・南北方向の溝状遺構・土坑群を確認した。以後、A 区南端から北へと随時遺構検出・掘削・記録写真撮影及び測図を実施。中・近世を主体とする土坑 40 基、溝状遺構 10 条他の遺構を確認。2 月 10 日調査区全体図作成のための割付作業を実施。17 日全体図作成開始、19 日遺構掘削完了、全体図完成。21 日遺跡の完掘写真撮影のため清掃、22 日高所作業車による遺跡全景写真の撮影。撮影終了後は重機による埋め戻し作業を開始。

B 区の調査は 2 月 23 日から機械掘削を開始した。A 区と B 区の間には住宅への進入路があるため、その部分を残して、調査区範囲を設定した。発掘作業員は 3 月 1 日より入り、遺構検出を進めた。溝数条、土坑、ピット、住居跡が検出された。2 日より、遺構掘削を開始する。例年になく、雨や雪の日が多く作業の進捗に影響を与える。18 日調査区全景写真のため清掃。19 日平面遺構実測（1/20）を行う。19 日から埋め戻しを開始し、20 日に機材撤収・明け渡しを行う。

第２章　調査地の位置と環境

小板井屋敷遺跡２は小郡市の中央をほぼ南北に貫流する宝満川の西岸に位置し、小郡市北部の丘陵部からなだらかに続く低台地の縁辺部に所在する。現況面での標高は 12 m前後である。遺跡の北側には段丘崖が残っており、築地川を望む立地である（第1・2図）。

小板井屋敷遺跡は平成9年に1次調査が行われ、弥生時代中期後半、後期後半～古墳時代初頭の住居跡や中世の井戸状遺構が確認され、さらには円面硯の出土も知られる。また、本報告の2次調査の直後、平成 22 年4月に3次調査が行われており、小面積で全容は明らかでないが、中世～近世の溝数条が確認されている。これらの調査成果を踏まえると、小板井屋敷遺跡は弥生時代中期後半、後期後半～古墳時代初頭の集落跡、奈良時代の集落跡、中・近世の集落跡であり、その内容が明らかになりつつある（第1図）。

周辺では、縄文時代以前の遺構・遺物は希薄であるが、小板井京塚遺跡（9）において剥片尖頭器が確認されている。縄文時代になると、大崎井牟田遺跡（13）において早期の集石遺構が検出され、また、大板井遺跡（21）においても押型文土器が確認されている。

弥生時代になると人々の活動が顕著となる。大板井遺跡（21）では前期中葉以降の貯蔵穴が多数認められ住居跡も確認されている。同遺跡では、中期前半を迎えると集落の規模が飛躍的に増大し、甕棺墓からなる墓域も形成される。また、中細形銅戈7本や舶載品と考えられる最古級の鉄鎌も出土している。集落経営は中期後半頃まで確認できるが、以後、中期末から後期初頭にかけては遺構の量が前代に比して大幅に減少する。再び隆盛を取り戻すのは後期中葉以後のことである。中期前半から後期初頭に至る集落を主体とする大崎中ノ前遺跡（19）は、竪穴式住居跡、掘立柱建物、土坑、溝、周溝状遺構で構成される。この他にも、周辺では中期前半と推定される多紐細文鏡2面と同時期の住居跡が確認された小郡若山遺跡（1）や径 12 mを測る2軒の大形円形住居が検出された小郡遺跡（2）など多くの集落が展開している。また、寺福童遺跡4次調査（15）では中広形銅戈9口を伴う埋納遺構が出土し、その埋納行為の主体者がこれらの遺跡動向と関連して問題となる。

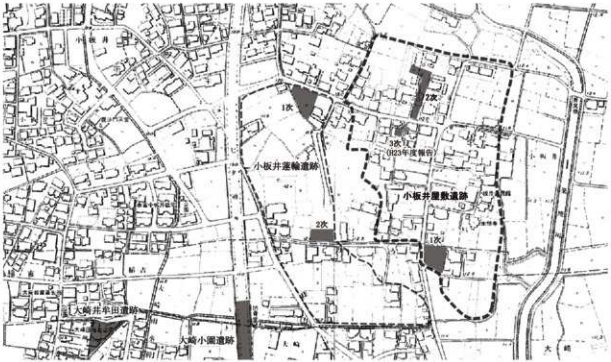
古墳時代では、寺福童遺跡1（16）で古墳時代初頭の方形周溝墓４基が確認された。同時期の集落としては、福童町遺跡（18）、大崎中ノ前遺跡（19）、大崎小園遺跡（14）や小板井屋敷遺跡（12）があげられる。これらの集落は、外来系土器がまとまって出土しているのが特徴である。中期には小規模散在型の集落形態をなしており、後期になると集落数が増加する傾向にある。小板井蓮輪遺跡2（11）では古墳時代終末期の集落跡が確認されている。

律令期になると、現在の小郡市・大刀洗町は古代御原郡にあたり、評段階の官衙と推定される上岩田遺跡（23）、推定御原郡衙の小郡官衙遺跡（＝小郡遺跡（2））及び移転郡衙とされる大刀洗町下高橋官衙遺跡（24）と官衙の変遷がわかる貴重な地域である。また、官衙周辺における諸集落の調査（小郡正尻遺跡（6）、小郡堂の前遺跡（7）、小郡前伏遺跡（4）、小郡若山遺跡（1）、大板井遺跡（21）、大崎井牟田遺跡（13）、大崎小園遺跡（14）、小板井京塚遺跡（9）、向築地遺跡（3）、井上薬師堂東遺跡（22）など）が進んでいる。

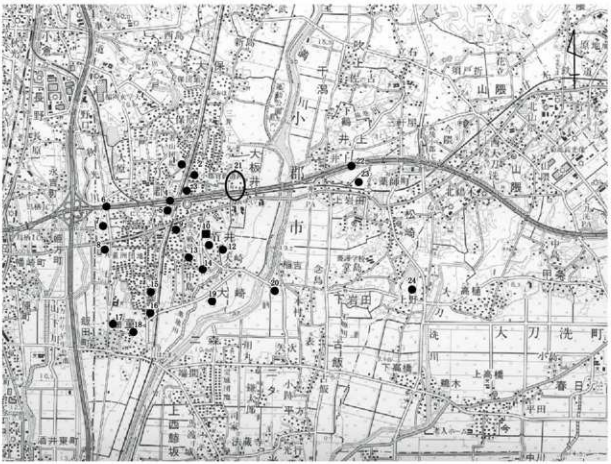
中世代の遺跡としては、稲吉元矢次遺跡（20）、大板井遺跡（21）、大崎小園遺跡（14）、小郡正尻遺跡（6）、小郡野口遺跡（5）、福童山の上遺跡（8）、福童町遺跡（17）などが確認されている。これらの遺跡分布から、12 世紀以前には宝満川の氾濫原付近に占地し、12 世紀以降は安定した自然堤防が形成され、村落は、そこや段丘上に立地したことがみてとれる。

近世代では、荒巻家文書『書触書廻状等書留』や尾関家文書『浪人格帳』によれば、大崎付近が久留米藩「浪人」荒巻家の居住地であったと考えられる。荒巻家は典型的な「豪農」経営を営んでいたと考えられ、近世陶磁器類、特に肥前陶磁が多く出土することからも、そのことがいえる。また、長崎街道の田代宿と薩摩街道の松崎宿を結ぶ英彦山道一部区間が大崎から稲吉にかけて比定されている。

以上、周辺の歴史的環境を概観してきた。これらの調査成果とあわせて今回の調査成果をしっかりと吟味することによって、小板井屋敷遺跡とその周辺地域の歴史復元に貢献することができるであろう。



第1図　調査区位置図（S=1/5000）



1 小郡若山　2 小郡　3 向築地　4 小郡前伏　5 小郡野口　6 小郡正尻　7 小郡堂の前　8 福童山の上　9 小板井京塚
10 小板井屋敷 2　11 小板井運輸　12 小板井屋敷　13 大崎井半田　14 大崎小園　15 寺福童 4　16 寺福童 1
17 福童町 4・6　18 福童町 1　19 大崎中ノ前　20 稲吉元矢次　21 大板井　22 井上薬師堂東　23 上岩田
24 下高橋官衙

第2図　周辺遺跡分布図（S=1/50000）

第３章　調査の成果

（１）Ａ区の遺構と遺物

【調査の概要】

Ａ区は南北61.2m、東西4.0～5.5mの調査区として設定している。中央部に汚水管が埋設されているため、南北に分断して調査を実施した。標高11.4～11.9m、現地表から約0.8～1.5m下る高さで遺構面を検出した。遺構面の上層は、南は畑耕作土、北は造成に伴う盛土および建物基礎による。

出土遺構は古墳時代～近世の土坑40基、溝状遺構10条、不明遺構１基、ピット群である。一部の溝状遺構を除き、全体に削平を受けており、遺構の残存状況は悪い。南北に長い調査区に、各時期の遺構が点在している状況で、時期による遺構分布位置の偏りは認められない。

【古墳時代・古代の遺構と遺物】

古墳時代・古代の遺構は、土坑４基と不明遺構１基、溝状遺構１条を確認した。

Ａ．竪穴建物（SC）

SX10（第３・４図）

調査区北端に位置し、SK27・30、SD10に切られる。平面プランは不明瞭で、柱穴も明確に揃わないが、上部が大幅に削平された竪穴建物の可能性も考えられる。埋土から、土師器の甑片（1）のほか、須恵器の細片が出土しており、少量であるが焼土の存在も認められた。

Ｂ．土坑（SK）

SK13（第４図）

調査区南端に位置し、大部分をSD02・SK14に切られる。南北残存長0.9m、東西残存幅0.6m、深さ10cmを測る。北東―南西に主軸をとる長方形を呈すると思われる。埋土から土師器、須恵器の細片が出土している。

SK31（第４図）

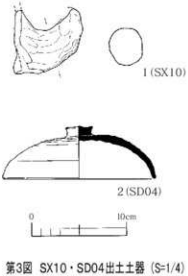
調査区中央部に位置し、SD08・09に切られる。東西に主軸をとる隅丸長方形もしくは楕円形を呈すると思われる。南北幅1.4m、深さ15cmを測る。埋土から土師器の細片が出土している。

SK32（第４図）

調査区中央のSK31南隣に位置し、SD08・09と後世の撹乱に切られる。不整楕円形を呈すると思われる。南北幅1.3m、深さ0.3mを測る。埋土から土師器、須恵器の細片が出土している。

SK35（第４図・図版３）

調査区中央部北寄りに位置する。SD08・09の底面で検出した。平面プランは長方形で、東西長1.0m、南北幅0.6m、深さ0.4mを測る。出土遺物は認められないが、平面プラン、埋土の状況からこの時期の遺構と判断した。

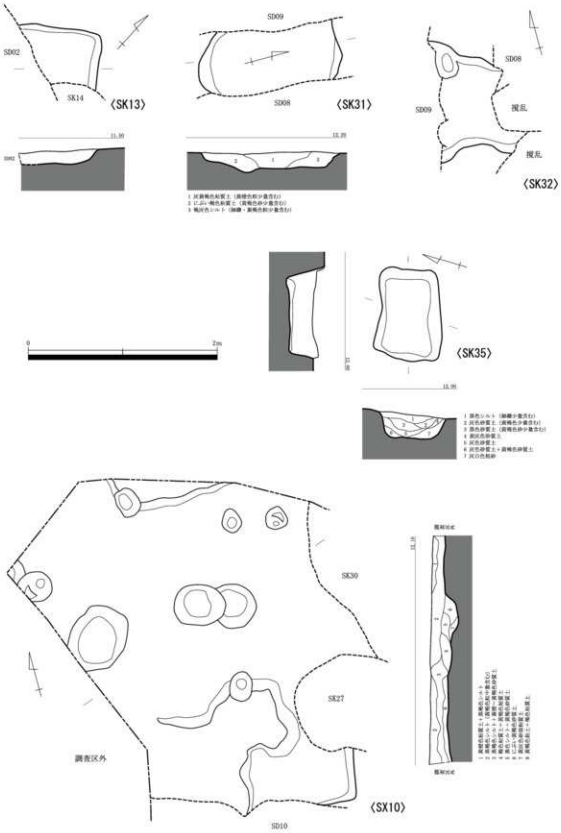


第3図　SX10・SD04出土土器（S=1/4）

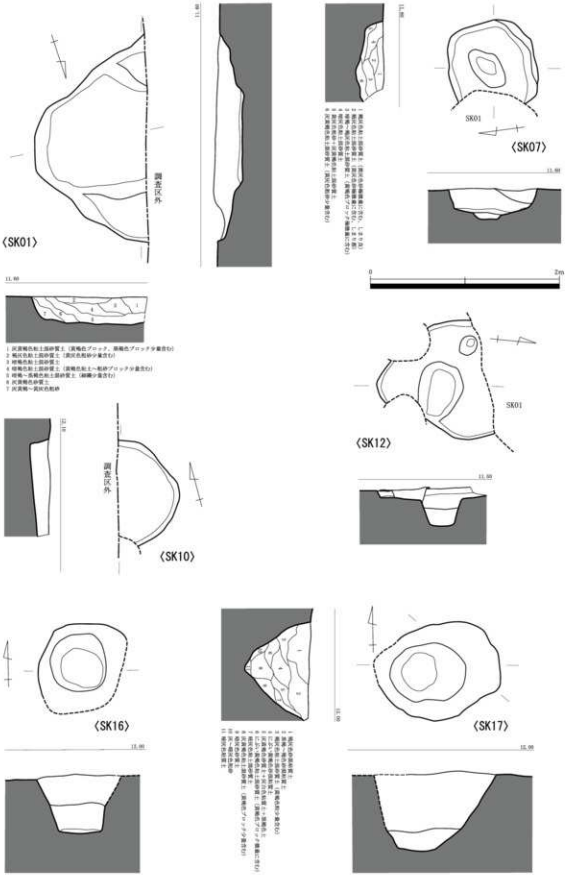
Ｃ．溝（SD）

SD04（付図・第３図・図版４）

調査区南寄りを東西に走る。上部は著しい削平を受けており、幅1.1～1.3m、深さ３～10cmのみが残存している。埋土は黒色シルトの単層で、遺構底面は凹凸が目立つ。底面直上から須恵器の杯蓋（2）が出土して



第4図　A区SK13・31・32・35・SX10平・断面図（S=1/40）



第5図　A区SK01・07・10・12・16・17平・断面図（S=1/40）

いる。

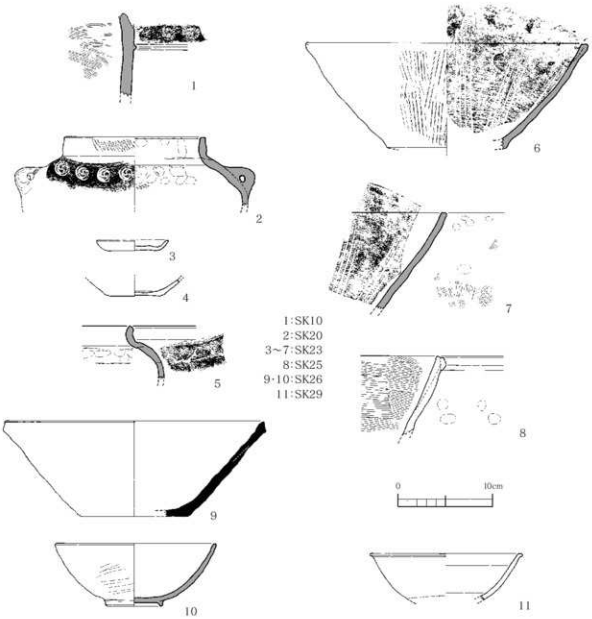
【中世の遺構と遺物】

中世の所産と考えられる遺構は、土坑 19 基、溝状遺構 4 条を確認した。土坑には井戸として使用されたと思われる 4 基を含んでいる。

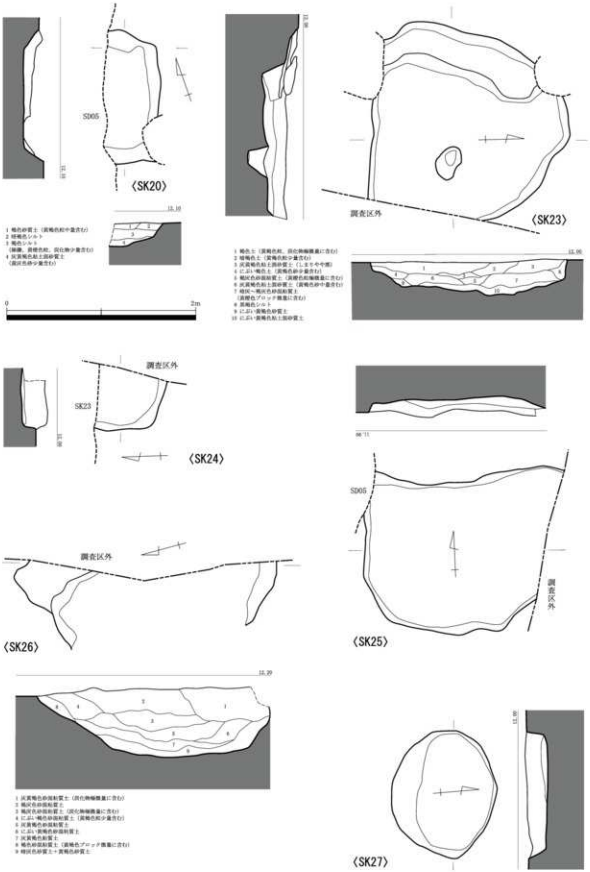
A．土坑（SK）

SK01（第 5 図・図版 2）

調査区南寄りに位置し、SK07・12 を切る。西側は調査区外へ延長する。南北残存長 2.1m、東西検出幅 1.2m、深さ 0.25m を測る。南北にテラスを持ち、平面プランは不整形を呈すると思われる。埋土から、土師器の小片と鞴羽口の細片が出土している。



第6図 A区土坑出土土器①（S=1/4）



第7図　A区SK20・23～27平・断面図（S=1/40）

SK07（第５図・図版２）

調査区南寄りに位置し、SK01 に切られる。隅丸方形で、東西残存長 0.95m、南北幅 0.9m、深さは底面の掘り込みを含めて 0.35m を測る。柱穴の可能性もあるが、一連のものと考えられる遺構が確認できなかったため、土坑として扱っている。遺物は出土していない。

SK10（第５・７図）

調査区中央部西端に位置し、一部は調査区外へ及ぶ。SD05 に切られる。南北残存長 1.15m、東西検出幅 0.6m、深さ 17cm を測る。平面プランは円形を呈すると思われる。埋土から、外面に菊花文をスタンプした瓦質火鉢（1）の他、瓦質擂鉢、土師器皿の小片が出土している。

SK12（第５図）

SK01 に切られる遺構。平面プランは楕円形を呈すると思われる。南北残存長 1.15m、東西幅 1.25m、深さは底面の掘り込みを含めて 0.3m を測る。埋土からは土師器皿の細片のほか、鉄滓が極少量出土している。

SK16（第５図）

調査区南半部に位置し、SK08・17 に切られる。平面プランは不整楕円形を呈すると思われる。残存径 1.05m、深さ 0.65m を測る。素掘りの井戸と考えられる。遺物は出土していない。

SK17（第５図・図版３）

SK03・08 に切られ、SK16 を切る。平面プランは不整楕円形を呈すると思われる。東西残存長 1.3m、南北幅 1.0m、深さ 0.8m を測る。底面の縁辺にきめの細かい粘質土が見られた。素掘りの井戸で、SK16 の造り替えと考えられる。埋土から、土師器皿の小片が出土している。

SK20（第６・７図・図版３）

調査区中央部西寄りに位置し、SD09 を切り、SD05 に切られる。平面プランは長方形を呈すると思われる。南北長 1.4m、東西残存幅 0.6m、深さ 0.25m を測る。廃棄土坑と考えられる。中層より巴文スタンプを施した瓦質羽釜（2）が、その他に土師器皿の小片が出土している。

SK23（第６・７図・図版３）

調査区中央部東寄りに位置し、SK24、SD09 を切る。平面プランは不整円形で、一部は調査区外へ延びる。東西検出長 1.95m、南北幅 2.05m、深さ 0.3m を測る。底面ピットの深さは 0.28m である。出土遺物は、底部回転糸切りの土師器皿（3・4）、瓦質の羽釜（5）、擂鉢（6・7）がある。その他、土師器鍋の破片やわずかではあるが鉄滓の出土が見られる。

SK24（第７図）

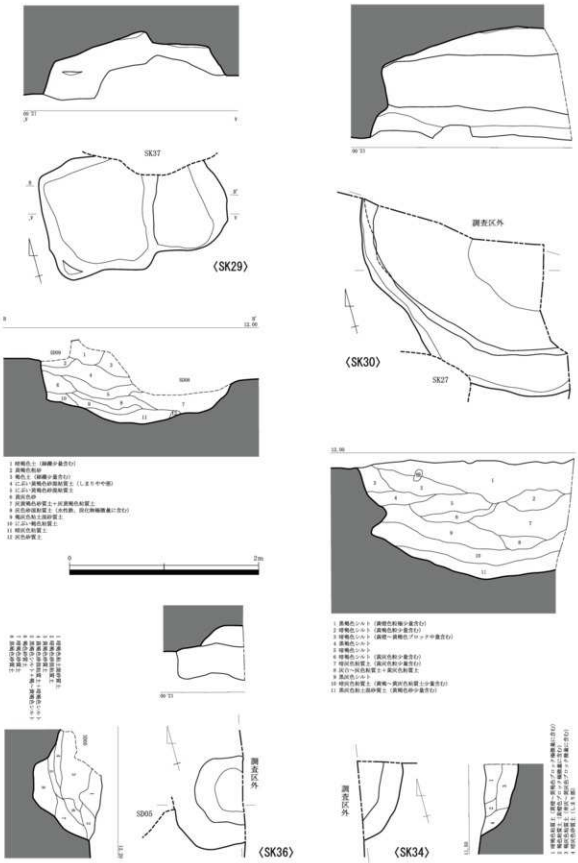
SK23 に切られ、一部は調査区外へ及ぶ。平面プランは長方形を呈すると思われる。東西 0.6m、南北 0.75m を確認しており、深さは 0.28m を測る。出土遺物は皆無であった。

SK25（第６・７図）

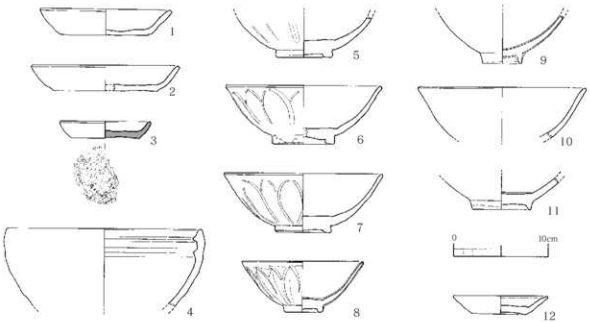
調査区中央部東寄りに位置し、SK28、SD05 に切られ、SD09 を切る。平面プランは不整形を呈し、一部は調査区外へ延長する。東西検出長 2.2m、南北幅 1.6m、深さ 0.2m を測る。出土遺物は土師器鍋（8）、瓦質土器の小片、用途不明の石造物片、軽石などである。

SK26（第６・７図）

調査区北半部東寄りに位置し、SD08 に切られる。平面プランは不整楕円形と想定され、一部は調査区外へ延びる。南北長 2.75m、東西検出幅 0.85m、深さ 0.7m を測る。廃棄土坑と考えられる。埋土中・下層を中心に、東播系須恵器鉢（9）、瓦質椀（10）、土師器鍋小片などが出土している。また下層の土は、被熱により赤化した拳大の礫を多数含んでいた。



第8図　A区SK29・30・34・36平・断面図（S=1/40）



第9図　A区SK30出土土器（S=1/4）

SK27（第7図・図版3）

調査区北端に位置し、SK30、SX10を切る。平面プランは楕円形で、東西長1.35m、南北幅1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色砂質土の単層であった。埋土から、土師器、瓦質土器の細片が少量出土している。

SK29（第6・8図・図版3）

調査区北半部に位置し、SK37、SD08・09に切られる。平面プランは長方形を呈すると思われる。東西長1.9m、南北幅1.2m、深さ0.7mを測る。出土遺物には、中国製白磁椀（11）、瓦質椀や土師器皿の小片などがある。

SK30（第8・9図・図版3）

調査区北端に位置し、全体の1/4のみを確認している。SK27に切られ、SX10を切る。平面プランは円形を呈すると思われる。東西1.9m、南北1.9m、深さ1.25mを測る。検出面から0.5mの深さに、足掛かり状の出っ張りがめぐっている。埋土の状況から、3回以上の掘り直しが行われたと考えられる。出土遺物は中世の遺構の中で最も多く、種類も多岐に及ぶ。土師器皿（1・2）・瓦質の皿（3）、国産陶器（4）、龍泉窯系青磁椀（5～9）、白磁椀（10・11）・皿（12）、その他石鍋片や砥石の破片などが見られる。上・下層とも13世紀代の資料が中心であり、遺構そのものは比較的短期間に使用されたものと考えられる。

SK34（第8図）

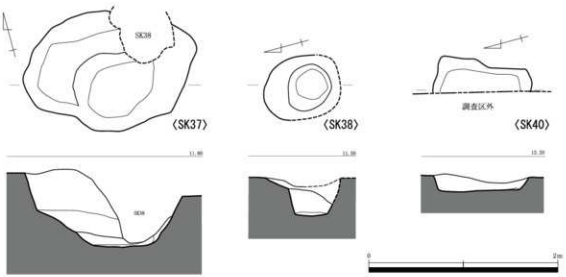
調査区中央部西寄りに位置し、SK33に切られる。南北0.75m、東西0.45mを確認しており、深さは0.3mを測る。埋土から、土師器の鍋・皿の細片が少量出土している。

SK36（第8・11図）

調査区中央部東寄りに位置し、SD05に切られる。南北残存長1.15m、東西検出長0.75m、深さ0.7mを測る。平面プランは不整円形で、素掘りの井戸と考えられる。出土遺物は瓦質の擂鉢（1）、土師器の小片をわずかに確認している。

SK37（第10・11図・図版3）

調査区北半部に位置し、SK29を切り、SK38、SD08に切られる。東西長1.9m、南北幅1.3m、深さ0.8m



第 10 図　A区SK37・38・40平・断面図（S=1/40）

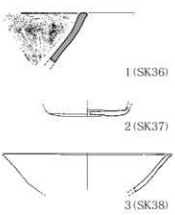
を測る。平面プランは不整楕円形で、2 段掘りの様相を呈する。埋土から、中国製青磁・白磁の小片、瓦質の椀や皿（2）などが出土している。

SK38（第 10・11 図・図版 3）

SK37 を切り、SD08 に切られる。掘削途中まで SK37 の一部と判断してしまったため、平面プランは完全に検出できていないが、楕円形と思われる。南北検出長 0.75m、東西幅 0.65m、深さ 0.4m を測る。素掘りの井戸と考えられる。埋土から、白磁椀の破片（3）や土師器の細片が少量出土している。

SK40（第 10 図）

調査区南半部西寄りに位置し、SK05 に切られる。遺構の大半は調査区外にあたり、南北幅 1.0m、東西 0.35m のみを確認している。深さは 15cm で、上部が著しく削平されている。埋土から、土師器の細片が極少量出土している。



第 11 図　A区土坑出土土器②（S=1/4）

B．溝（SD）

SD02（付図・第 12 図）

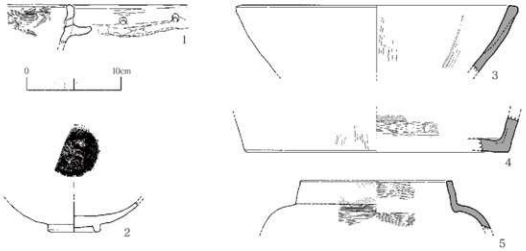
調査区南端を東西に走り、SK02・14、SD01 に切られ、SK13、SD03 を切る。幅 2.1m の 2 段掘りで、検出面からの深さは 0.18 ～ 0.3m を測る。埋土に流水の痕跡は認められなかった。残存状況は不良であるが、規模から集落の外郭溝とも考えられる。遺物の出土は少量であるが、土師器鍋（1）、瓦質の擂鉢（3）・火鉢（4）・羽釜（5）の他、青磁皿（2）などバラエティに富む。

SD03（付図）

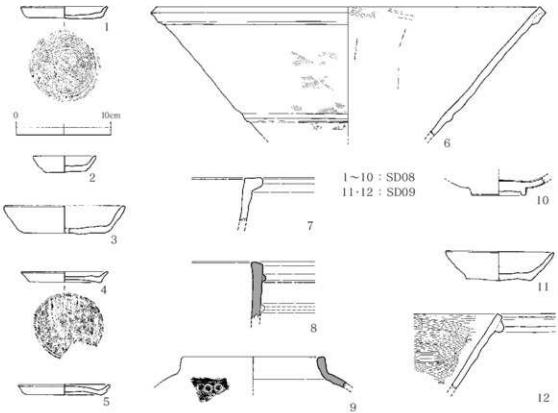
SD01・02 に切られる東西方向の溝状遺構。北岸の一部のみを検出した。規模は不明であるが、SD02 の前段階の区画溝とも考えられる。埋土は黒色シルトの単層。遺物の出土は認められない。

SD07（付図）

調査区南半部を東西方向に走るが、西側は SK08 に切られている部分で断絶している。南岸の一部のみ



第 12 図　A区SD02出土土器（S=1/4）



第 13 図　A区溝状遺構出土土器①（S=1/4）

を検出しているが、SD09 との関連も想定される。遺物の出土は認められない。

SD08（付図・第 13・20 図・図版 4）

調査区北半部を南北に走り、SK26･29･31･32･37･38、SD09 を切る。幅 2.3. ～ 2.5m、深さ 0.6m を測る。断面は台形に近いU字型で、土層からは堆水の可能性が考えられる。北側は SD10 に切られるが、その途中で断絶している。なお SD11 は、位置および埋土の状況から SD08 と同一の溝状遺構であると思われる。埋土から、土師器皿（1 ～ 5）、土師器鍋（6・7）、瓦質の火鉢（8）・羽釜（9）、青磁椀の小片（10）、

砥石（2）の他、鉄滓、粘土塊などが出土している。

SD09（付図・第 13 図・図版 3）

調査区北半部を南北に走り、SK29 を切り、SD08 に切られる。幅 0.9 ～ 1.1m、深さ 0.3m を測り、断面は台形を呈する。残存状況は不良であるが、一部南半部でも延長部分を確認している。方向が揃うことから、SD08 に先行する区画溝とも考えられる。出土遺物は小片が多く、皿（11）・鍋（12）など土師器を主体とし、微量の瓦片も見られる。

【近世の遺構と遺物】

近世の所産と考えられる遺構は、土坑 15 基、溝状遺構 4 条を確認した。土坑には井戸として使用されたと思われる 2 基を含んでおり、溝状遺構のうち SD10 は 1 条と数えている。

A．土坑（SK）

SK02（第 14・17 図・図版 2）

調査区南端に位置し SD01 に切られる。平面プランは楕円形で、東西長 1.5m、南北幅 1.2m、深さ 0.2m を測る。埋土から、見込に砂目や蛇の目釉ハギを施した国産陶器（1・2）や土師器片が出土している。

SK03（第 14 図・図版 2）

調査区南半部に位置し、遺構の大半は調査区外に所在する。SK08 を切る。平面プランは楕円形を呈すると思われる。南北検出長 1.25m、東西検出幅 0.45m、深さ 15cm を測る。埋土から土師器の細片が極少量出土している。

SK05（第 14・20 図）

調査区南半部に位置し、SD05 を切る。平面プランは不整方形を呈すると思われる。南北検出長 1.5m、東西検出幅 0.7m、深さ 15cm を測る。埋土からは被熱により赤変した砥石（1）のほか、鞴羽口の小片、鉄滓、国産陶器の細片が少量出土している。

SK06（第 14・17 図・図版 2）

調査区南半部に位置し、平面プランは不整楕円形を呈すると思われる。一部は調査区外へ延びる。東西検出長 1.7m、南北幅 1.65m、深さ 0.6m を測る。埋土の下層を中心に、肥前系擂鉢（3・4）のほか、福岡産と思われる陶器の小片、鉄滓が出土している。

SK08（第 14 図・図版 2）

調査区南半部に位置し、SK03・11 に切られ、SK19 を切る。平面プランは隅丸長方形を呈し、東西検出長 2.25m、南北幅 1.45m、深さ 0.35m を測る。埋土から、少量の染付、土師器片が出土している。

SK09（第 15・17 図・図版 2）

調査区南端に位置し、平面プランは不整形を呈する。長辺 1.15m、短辺 1.05m、深さ最大 0.25m を測る。埋土からは染付（5）や土師器鍋の小片が少量出土している。

SK11（第 15 図）

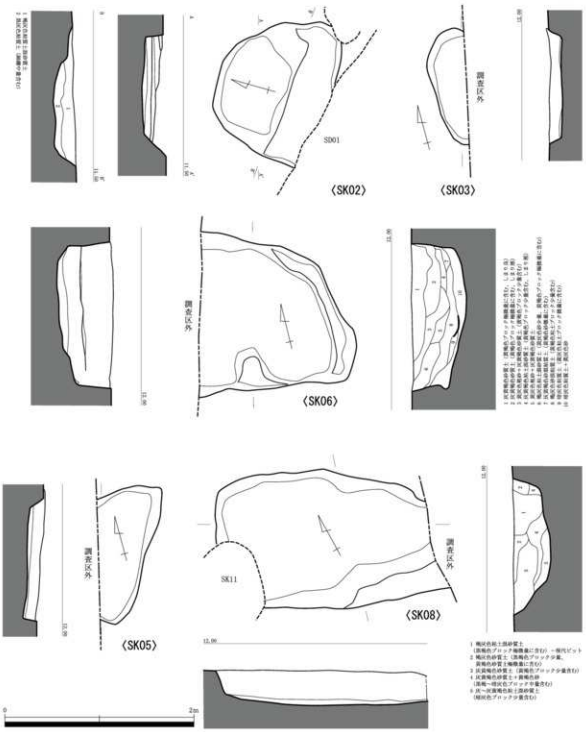
調査区南半部に位置し、SK06 に切られ、SK08 を切る。平面プランは楕円形を呈し、南北残存長 0.95m、東西幅 0.9m、深さ 0.25m を測る。遺物の出土は認められない。

SK14（第 15・17 図）

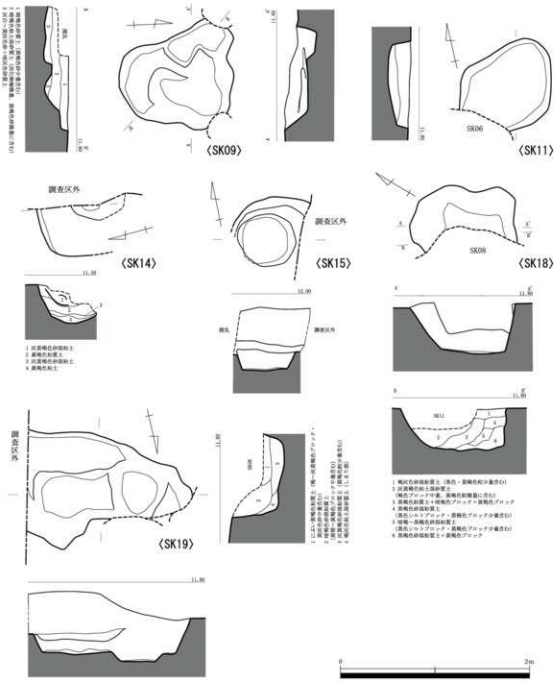
調査区南東端に位置し、SD02 を切る。南半部は上部を攪乱によって削平されている。掘削時に先後関係の把握を誤ったため、遺構の南端部分は未確認であるが、直径 1.3m 程度の円形を呈すると思われる。断面から、遺構を 20cm ほど埋め戻したのち、大甕（8）を設置し、その内部に土師器皿（6・7）を入れ込んだ状況が看取できた。便槽として使用された施設か。

SK15（第 15 図・図版 2）

調査区南半部に位置し、一部は調査区外へ延びる。南側は攪乱によって削平されているが、直径 1.0m



第 14 図　A 区 SK02・03・05・06・08 平・断面図（S=1/40）



第 15 図　A 区 SK09・11・14・15・18・19 平・断面図（S=1/40）

前後の円形を呈すると思われる。素掘りの井戸か。遺物の出土は皆無であった。

SK18（第 15 図）

調査区南半部に位置し、大部分を SK08 に切られる。平面プランは不整長方形を呈すると思われる。南北幅 1.1m、東西残存長 0.75m、深さ 0.45m を測る。微量の土師器片と少量の鉄滓が出土している。

SK19（第 15・17 図）

調査区南半部に位置し、SK08 に上部を大きく削平されている。平面プランは不整形で、東西検出長 1.75m、南北幅 1.2m、深さ最大 0.8m を測る。出土遺物はいずれも小片だが、染付（9）のほか赤絵を施したもの

も確認している。

SK21（第 16 図・図版 3）

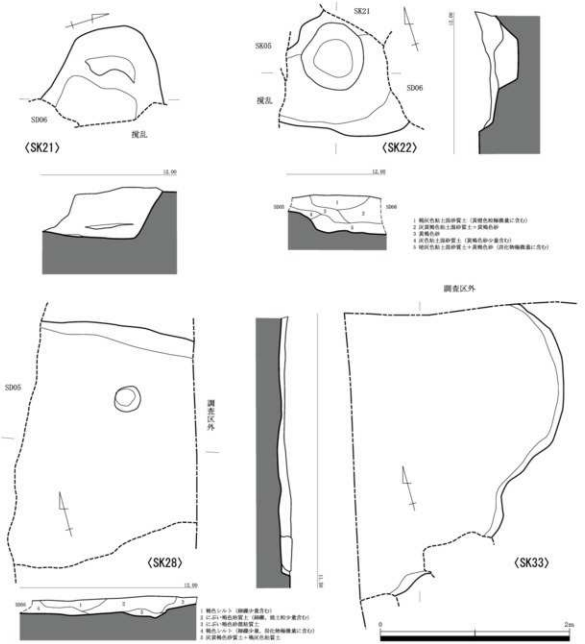
調査区南半部に位置し、SD06 に切られ、SK22 を切る。東西検出長 1.05m、南北幅 1.25m、深さ 0.55m を測る。埋土からは、細片であるが肥前系陶器片、土師器皿の破片などが出土している。

SK22（第 16 図・図版 3）

調査区南半部に位置し、SK05・21、SD06 に切られる。東西残存長 1.1m、南北幅 1.2m、深さ 0.5m を測る。SK16 と同様、素掘りの井戸の可能性も考えられる。土器類の出土は皆無であった。

SK28（第 16・17 図）

調査区中央部に位置し、SD05 に切られる。検出時に、南に隣接する SK25 との先後関係を誤ったため、



第 16 図　A 区 SK21・22・28・33 平・断面図（S=1/40）

南端部分は未確認である。埋土から、土師器鍋（10）、肥前系陶器皿（11）など、少量の遺物が出土している。

SK33（第 16・17 図）

調査区中央部に位置し、遺構の大部分は調査区外へ延長する。上部は著しく削平を受けており、平面プランは定かではない。出土遺物は細片が多いが、一部肥前系擂鉢（12）、陶器椀（13）など形状を残すものが見られる。

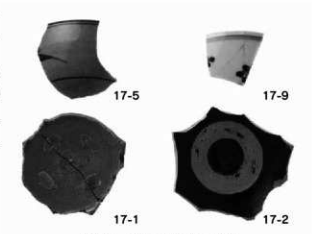
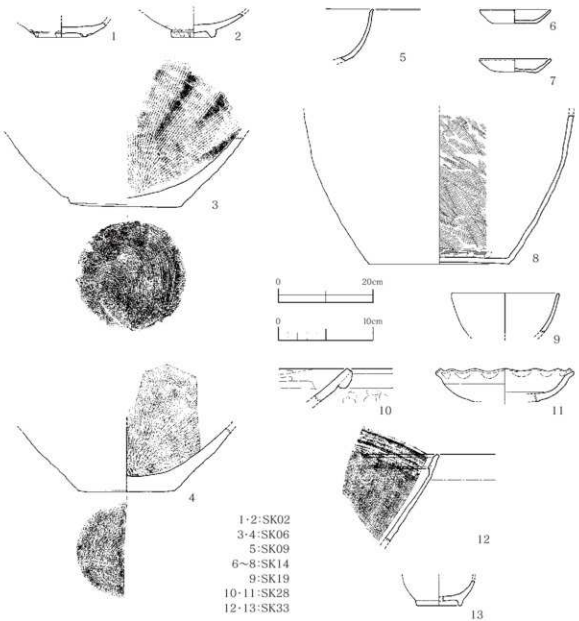


写真1　A区土坑出土土器



第 17 図　A 区土坑出土土器③（S=1/4）

B．溝（SD）

SD01（付図・第 19 図）

調査区南端に位置し、SK02 を切る。東西方向に走っているが、西端は調査区内で断絶する。検出幅 1.2m、深さ 15 ～ 20cm を測る。上部は後世の撹乱によって大幅に削平されており、規模や断面形態は不明であるが、集落の外郭溝とも考えられる。遺物は小片が多いが、肥前系陶器擂鉢（1）、染付の椀（2・3）のほか、燻し瓦の破片や磁器製の錘状製品（4・5）などが確認されている。

SD05（付図・第 19 図・図版 4）

調査区南半部を南北に走り、中央部で東に屈曲して調査区外へ延びる。SK10・28 を切り、SK05 に切られる。幅 1.3m、深さは検出位置によって異なるが 0.3 ～ 0.5m を測り、遺構底面は標高 11.5m 前後に揃えられている。隣接する同時期の遺構は上部を大きく削平されていることから、本来の規模はこれより大型であった可能性が高い。遺物の出土量は多かったが、いずれも小片であった。土師器の皿（6）、鍋（8）、肥前系陶器の椀（7）、七輪状製品（10）などのほか、砥石（1）、鞴羽口の破片や鉄滓も出土している。

SD06（付図・第 21 図）

調査区南半部に位置し、東西方向の一部のみを検出している。SK08 のような隅丸長方形の土坑の可能性もあるが、埋土の状況から溝状遺構と判断した。幅 1.3m、深さ 0.5m を測り、SK21・22 を切る。SD05 と近接するが、底面レベルが大幅に異なり、直接の関係は認められない。遺物は土師器の細片のほか、銅銭 1 点（1）が見られるのみである。

SD10（付図・第 18 ～ 21 図・図版 4）

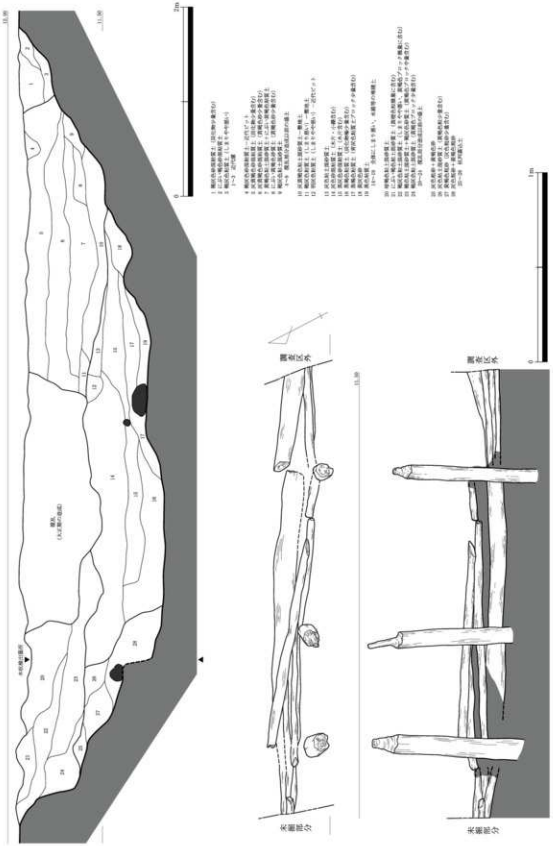
調査区北端を東西に走る大溝として検出した。元々溝として機能していたのは、標高 11.00m 以下の 14 ～ 19 層の範囲であり、北岸には木杭を打ち込んで細竹を渡すという、この地域の農村では一般的な護岸施設を設置していたようである。埋土は粘質でしまりが非常に悪く、木葉などの有機物を多く含んだアンモニア臭のする土で、溝は水の動きの少ない澱んだ場所であったと考えられる。この溝を埋め殺したのち、上面に砂質土を敷いて、標高 11.40m の高さで整地を行っている（南整地土 7 ～ 13 層、北整地土 23・24 層）。その後、さらに盛土（南盛土 5・6 層、北盛土 20 ～ 22 層）してから大正期に造成を行い、南側に溝（1 ～ 3 層）を設置したと想定される。遺物は、南側溝、南・中央・北の 3 地点を整地土の上下で分割して採集したが、いずれも 17 世紀後半から 18 世紀中頃のものを主体に、古代・中世の遺物が散見される状況であった。調査区内もしくはその周辺から土取りをして、比較的短期間で埋め殺しと盛土工事を行ったと考えられる。

遺物は陶器皿（11・13・15）・椀（22・23）、灯明皿（17）、甕（16・21）、擂鉢（18 ～ 20）のほか、磁器皿（14・25・26）・椀（24）、土師器鍋（27）、銅銭（2）その他用途不明の陶器などが出土している。また、鞴羽口の破片、鉄滓、砥石（3）も見られる。

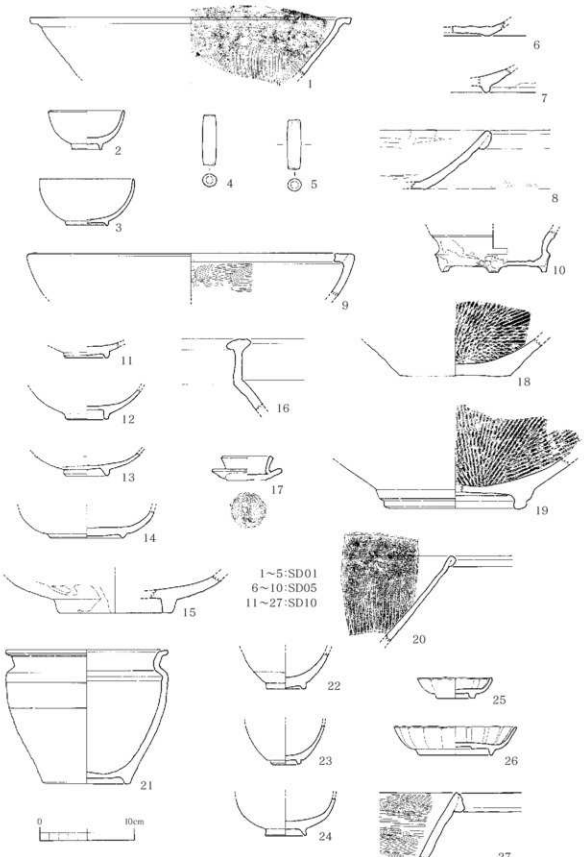
【その他の遺構と遺物】（第 20・21 図）

調査区では多数のピットを検出しているが、調査対象範囲が道路幅であるため、掘立柱建物や柵列を構成するか否かの判断は困難であった。出土遺物より、ピットの大半は中世～近世代の所産であると考えられる。

このように、A 区では中世以降の集落域として当地が利用されていたことが明らかとなった。古代以前の遺構は極めて少なく、古い遺物の混入もわずかであった。



第 18 図　A 区 SD10 平・断面図（S=1/20，1/40）



第 19 図　A 区溝状遺構出土土器②（S=1/4）

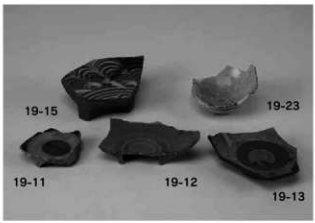


写真2　A区溝状遺構出土土器（陶器）

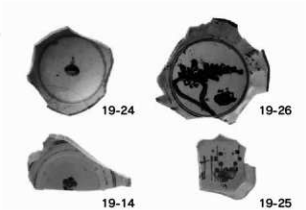
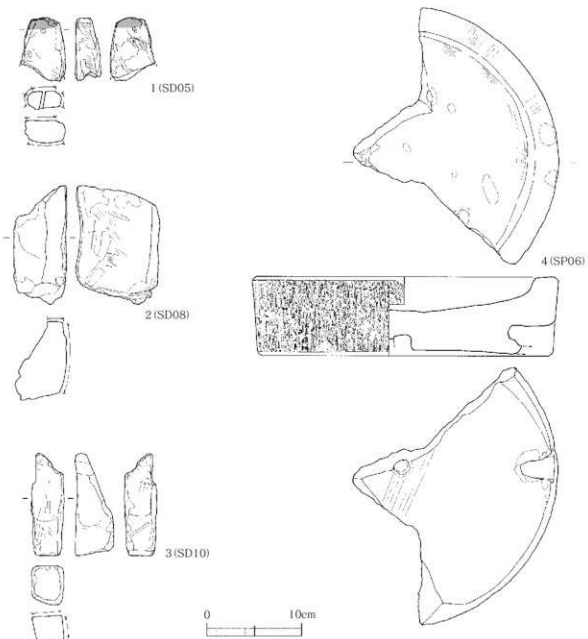


写真3　A区溝状遺構出土土器（磁器）



第 20 図　A 区出土石器（S=1/4）

第 21 図　A 区出土銭貨（S=1/1）

（2）B区の遺構と遺物

【調査の概要】

B区は調査対象地の北側にあたり、計画道路が西に折れる部分を起点とした東西方向の調査区（長さ18.5m ×幅 6m）で、中央部には北側へ一部突出する部分がある。B区の北へ 10 m弱で、築地川を望む段丘崖が残っており、現比高差は 2m 程度である。

調査地には以前、鶏舎等が建設されており、解体時の廃棄物などが一定量確認されたが、基礎は深くなく、遺構面で撹乱等を受けた個所は少なかった。その後、畑地として利用されており、表土は耕作土でしまりがなく40cm 程度、その下に旧表土層が 30 ～ 40cm 堆積している。近世の東西方向溝群はこの旧表土層を切って、掘り込まれている。旧表土の下には茶褐色～黄褐色土の地山が分布し、遺構検出面の標高は 12.0 ～ 12.3 mを測る。また、黄褐色粘質土以下（約 1.3 ～ 1.4 m下）には、黄褐色砂層が存在し、湧水層となっている。

主に、7 ～ 8 世紀代の住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土坑跡、近世代の溝が検出された。

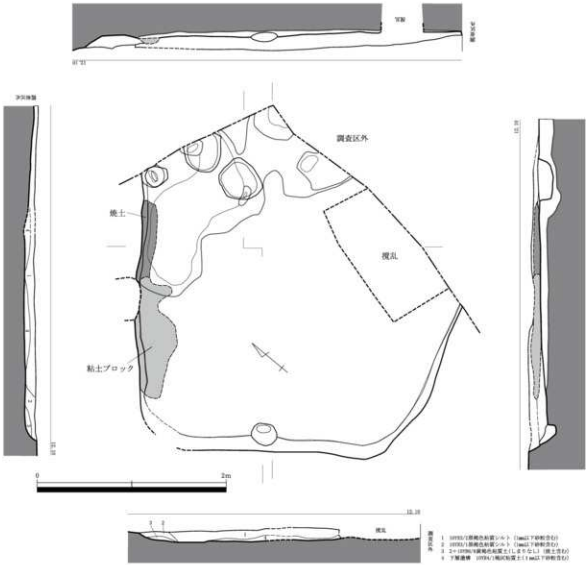
【古代の遺構】

A．竪穴建物（SC）

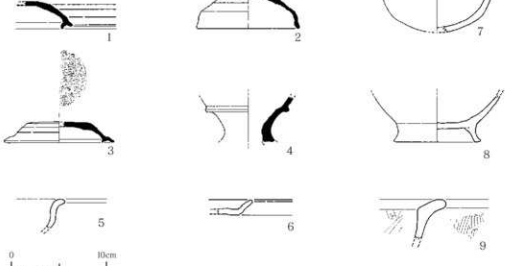
SC01（第 22・23 図、図版 6）

調査区の北突出部に位置する。北～東にかけては調査区外に及ぶ。SC01 下層には SK07 が存在する。削平を受けており、残存は悪い。主軸は N―40°―W であり、南隅がやや緩やかにカーブする隅丸長方形のプランかと思われる。長軸 3.65m 以上、短軸 3.4m 程度、床面までの深さは 15cm 程度を測る。竪穴建物内ではカマド、浅い小土坑 2 基、壁沿いの小穴 2 基を検出した。カマドは北西壁西よりに付設したと考えられる造り付けカマドである。人為的に大きく崩されており、その構造は不明である。カマド残骸部の北側壁際には焼土層が分布している。竪穴内には主柱穴は確認されない。貼床は北東側に一部顕著にみられる。中央部では下層に SK07 が存在することもあって、明確な貼床層がみられなかった。

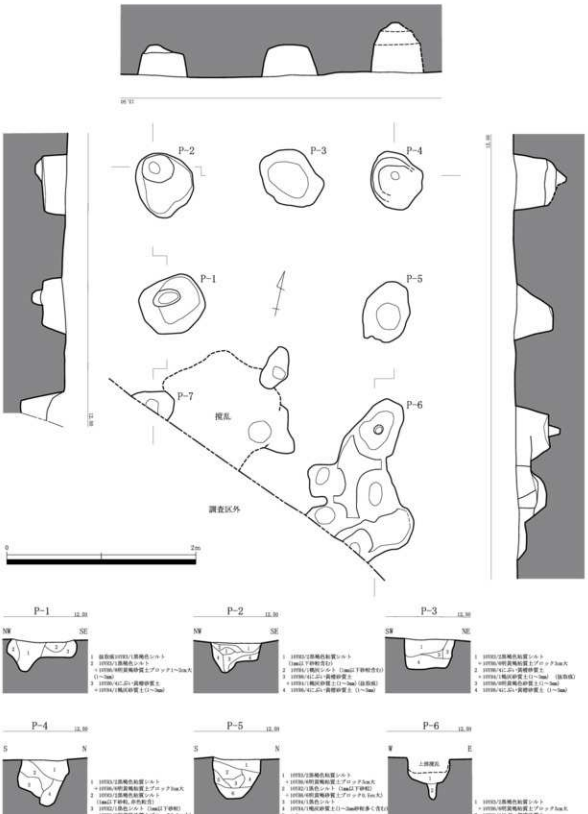
北東部の明確な貼床層から須恵器杯蓋（3）、土師器椀口縁部片（5）、土師器杯（7）が出土し、Pit1 からは須恵器杯蓋（2）が出土している。上層からは須恵器杯蓋口縁部片（1）、須恵器壺頸部（4）、土師器鍋口縁部片（9）、土師器高台付椀（8）、中世土師皿片（6）が出土した。



第 22 図　B 区 SC01 平・断面図（S=1/40）



第 23 図　B 区 SC01 出土土器（S=1/4）



第 24 図　B 区 SB01 平・断面図（S=1/40）

B．掘立柱建物（SB）

SB01（第 24 図、図版 6・7）

調査区東側で検出した。南側は調査区外に及ぶ。主軸はＮ－ 40°－Ｅである。南北 2 間ないしは 2 間以上×東西 2 間の側柱建物で、桁行 2.7m（以上）×梁行 2.6m を測る。柱掘り方は楕円形～長円形を呈する。短軸 45cm 程、長軸 70cm 程、深さは 30cm ～ 50cm 程である。柱痕は確認されず、P1 のように抜き取り痕が確認されるものもある。Pit1・3・4・5・6・7 の埋土から土師器小片が出土している。

C．土坑（SK）

SK01（第 25・28 図、図版 7）

調査区東側で検出した。SD02 に切られている。検出面での上端は長軸 2.0m ×短軸 1.6m の隅丸方形状を呈し、やや膨らみを持ち、1.3m で底面となる。底面から長軸 1.4m ×短軸 0.85m の楕円形状の掘り込みがみられ、20cm ほど下がる。埋土は水平堆積を示し、一部にブロック粘土を含んでいる。9 層以下では湧水がみられた。土層の堆積状況から明確な裏込め土は確認できないが、10 層や 5 層はその可能性が考えられ、井戸と判断できる。有機質の簡易な井戸枠があった可能性が窺われるが、その痕跡は検出できなかった。

最下層から土師器椀口縁部片（2）、土師器甕口縁部小片（3）、下層から白磁碗口縁部片（4）、上層から須恵器杯蓋つまみ部（1）、黒色土器高台部（5・6）が出土している。他に上層から砂岩製砥石が出土している。

SK02（第 25 図、図版 7）

調査区東側で検出した。SK05 を切り、SD03 に大きく切られている。全容は不明であるが、長軸 1.4m 以上×短軸 0.65m 以上を測る。残存部での深さは 0.3m ほどである。レンズ状の自然堆積が認められる。掘り込内には、小穴が数基みられる。埋土からは須恵器壺胴部小片が出土している。

SK03（第 25 図、図版 7）

調査区東側で検出した。SD02 に切られている。検出面での上端は長軸 1.2m 以上×短軸 0.6m の長方形状の土坑で、深さは 25cm 程度と浅い。埋土からは土師器小片が出土している。

SK04（第 26・28 図、図版 7・8）

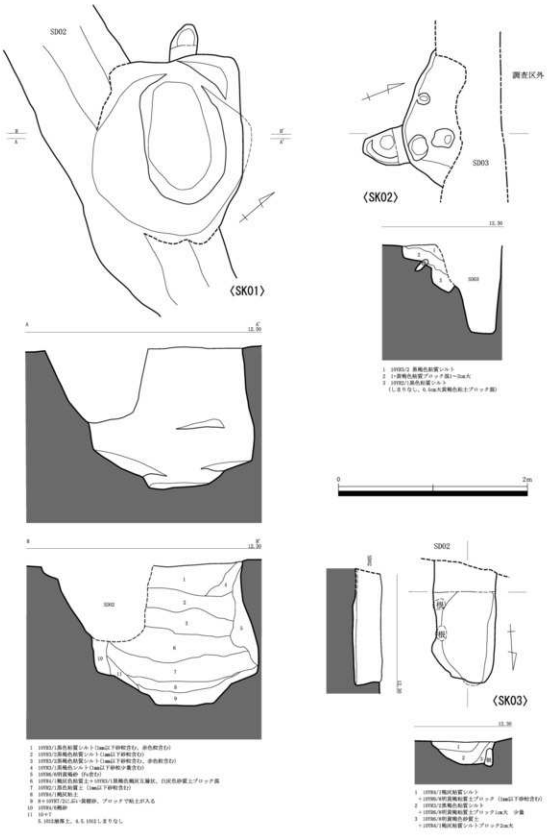
調査区東側で検出した。SK05 に近接している。長軸 0.8m ×短軸 0.7m の楕円形状を呈する小土坑である。深さは 0.35m を測り、東隅に径 0.3m のピット状の掘りこみがみられる。埋土にはブロック土を含む。埋土から土師器皿口縁部（7・8）が出土している。

SK05（第 26・28 図、図版 8）

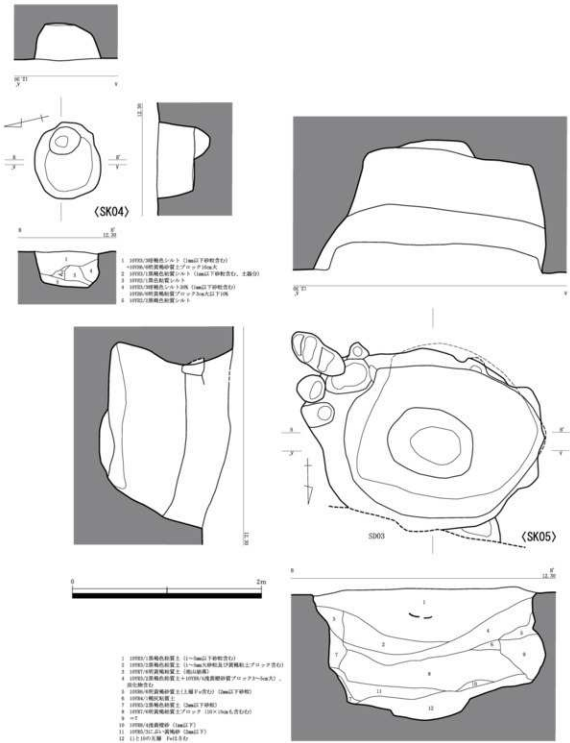
調査区東側で検出した。SD03 および SK02 に切られている。検出面での上端は長軸 2.6m ×短軸 1.9m 程度の倒卵形状を呈し、やや膨らみを持ち、1.4m で底面となる。底面から長軸 0.9m ×短軸 0.7m の楕円形状の掘り込みがみられ、10cm ほど下がる。埋土は水平～レンズ状堆積を示し、一部にブロック粘土を含んでいる。12 層下半以下では湧水がみられた。土層の堆積状況から、明確な裏込め土は確認できないが、3・7 層や 5・9 層はその可能性が考えられ、井戸と判断できる。有機質の簡易な井戸枠があった可能性が窺われるが、その痕跡は検出できなかった。中層から土師器皿（11）、上層から土師器鍋口縁部（12）、須恵器壺底部（9）、須恵器杯（10）、土師器鍋（13）が出土している。

SK06（付図）

調査区東側で検出した。SK05 に近接する。検出面での上端は長軸 2.6m ×短軸 1.3m 程度の長円形状を呈し、緩やかに下がり、20cm 程で底面となる。埋土は概ね黒褐色シルト土で構成される。埋土からは須恵器壺胴部小片が出土している。



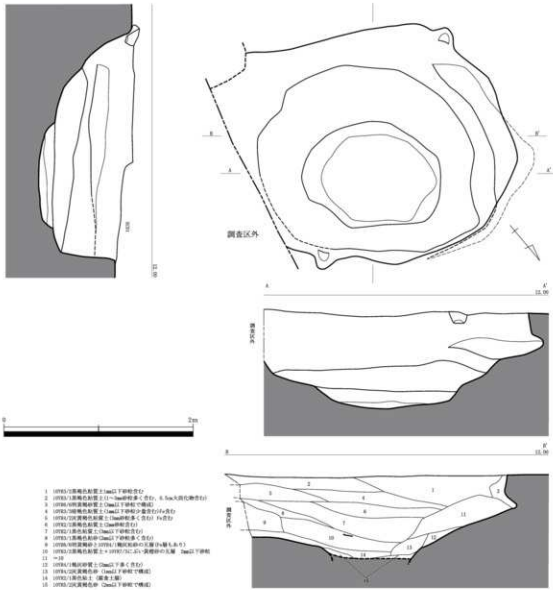
第 25 図　B 区 SK01・02・03 平・断面図（S=1/40）



第 26 図　B 区 SK04・05 平・断面図（S=1/40）

SK07（第 27・28 図、図版 8）

調査区の北突出部で検出した。SC01 の下層遺構である。一部は調査区外に及ぶが、検出面での上端は長軸 2.9m 以上×短軸 2.5m の隅丸長方形状を呈し、やや膨らみを持ち、40cm 程度で北側にテラス部分を有し、さらに 40cm で底面となる。底面から長軸 1.5m ×短軸 1.1m の楕円形状の掘り込みがみられ、15cm ほど下がる。埋土はレンズ状～ブロック堆積を示す。15 層以下では湧水がみられた。土層の堆積状況から、明確な裏込め土は確認できないが、12 層（11・13 層）はその可能性も考えられ、井戸と判断し



第 27 図　B 区 SK07 平・断面図（S=1/40）

た。有機質の簡易な井戸枠があった可能性や、それを抜き取った可能性が考えられる。下層から須恵器杯蓋（17）、土師器甕（20）、中層から須恵器杯蓋口縁部片（15・16）、土師器甕口縁部（19）、上層から須恵器杯（14）、須恵器杯蓋（18）が出土している。他に上層から砂岩製砥石が出土している。中層の黒褐色粘質土～砂層では、ひょうたんの小片が出土している。

SK08（付図）

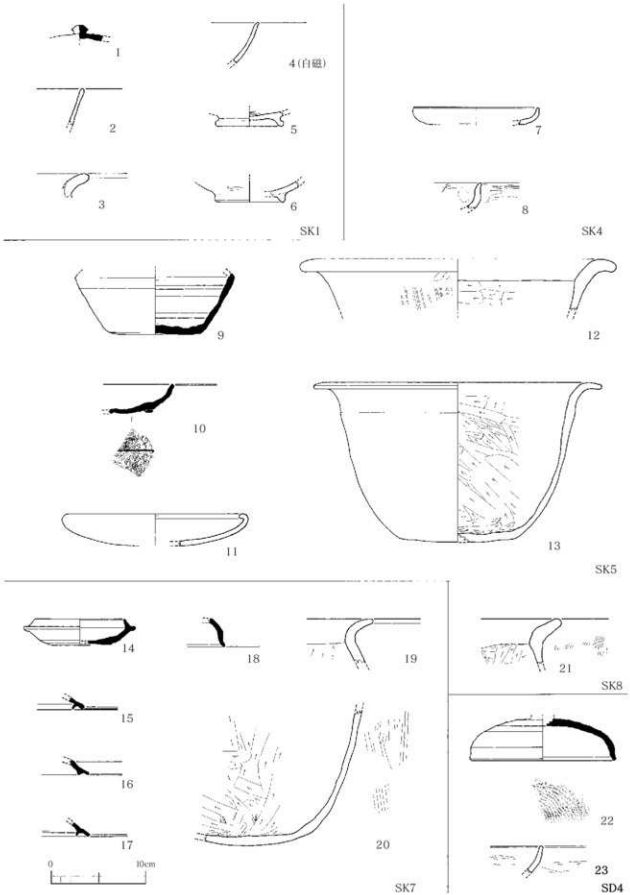
調査区北突出部北東隅で検出した。そのほとんどが調査区外に及ぶ。検出面での上端は長軸 1.5m × 短軸 0.2m 程度の弧状を呈する。深さは 30cm 程度である。埋土は概ね黒褐色シルト土である。埋土から土師器甕口縁部（21）が出土している。

【近世以降の遺構】

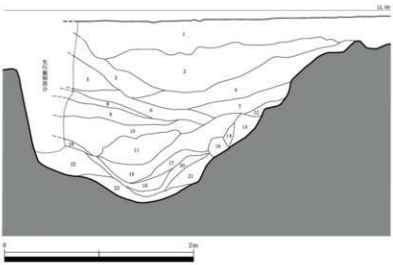
A．溝（SD）

SD01（付図）

調査区南端の東から中央付近にわたり、検出された。東西方向の溝で、溝の北側肩部分が一部検出されているにすぎない。深さ 10cm 程度の浅い溝で、埋土は灰褐色シルト土である。出土遺物はみられない。



第 28 図　B 区 SK01・04・05・07・08、SD04 出土土器（S=1/4）



第 29 図　B 区 SD03 土層断面図（S=1/40）

第 30 図　B 区 SD02・03 出土土器・石器（S=1/4）

SD02（付図・第 30 図、図版 8）

調査区南側、東から中央付近にわたり、検出された。東西方向の溝で、SD01 に沿う形で検出される。断面逆台形状の溝で、深さは 70 ～ 80cm である。最下層には層厚 10cm 程度の灰褐色土が堆積し、その上には黄褐色粘土ブロックを多く含む人為的な埋土が存在する。ブロック混土にはガラス容器、近現代陶磁器類など、近現代までの遺物が含まれる。最下層の灰褐色土は近世代の遺物（瓦・陶磁器類）を包含している。図化したものは、下層から出土した主なもので、陶器擂鉢（1）、陶器火鉢（2）、土師質火鉢（3）、陶器徳利（4）、赤間硯（5）である。

SD03（付図・第 29・30 図、図版 8）

調査区北側および北突出部において検出された、東西方向の溝で、幅 2.8m 程度、深さ 1.6m を測る。現在の地籍図にも反映されている溝である。断面逆台形状の溝で、南側は急な傾斜を持つが、北側は緩やかな傾斜を持ち、地山の崩落層が多く確認される。最下層の 23 層付近からは湧水が認められた。出土遺物は近世から近代までの陶磁器、近世瓦が出土している。最下層からは陶器碗（6）が出土している。

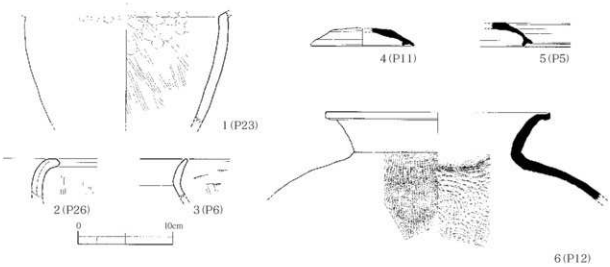
SD04（付図・第 28・29 図）

調査区中央において検出された、北北東～南南西方向の溝で、非常に浅い溝である。深さは 5 ～ 10cm である。SD02・03、SK05 に切られている。埋土は黒色シルトである。埋土からは須恵器杯蓋（22）、土師器杯口縁部片（23）が出土している。

B．柱穴（Pit）（付図・第 31 図）

調査区中央～東側で多くの Pit が検出された。おそらく、掘立柱建物や柵等を構成すると考えられるが、限られた調査区内では判断がつかない。埋土は灰褐色シルトのものと黒～黒褐色シルトのものがみられる。後者の Pit からは弥生時代～古代までの遺物が出土している。

以上のように、調査区が道路幅で限られているものの、段丘縁辺部に 7 世紀～ 8 世紀代の集落が営まれていたことが垣間見れる調査成果となった。東西方向の近世以降の所産の溝群についても、A 区の調査成果と併せて、検討する必要があるだろう。



第 31 図　B 区 Pit 出土土器（S=1/4）

第４章　調査成果のまとめ

小板井屋敷遺跡では、これまでに弥生時代中期後半、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の住居跡や中世の井戸状遺構が確認されており、さらには円面硯の出土も知られている。本調査は２次調査にあたるが、新たに古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡や中近世の集落跡が発見された。

A区には、古墳時代の遺構は極めて少なく、後述するB区や周辺遺跡で確認されている奈良時代の遺構・遺物も、ほとんど見つかっていない。検出遺構の大多数を占めるのは、中～近世の土坑・溝である。ここから出土した遺物を見ると、12 世紀後半から 17 世紀にかけてほぼ間断なく集落が営まれてきたと考えられる。特に、位置や規模は変化しているが、中～近世にわたって複数回の掘削と埋没を繰り返している溝は注目に値する。遺跡の所在地の小字名は「屋敷・神屋敷」であり、すぐ北は「屋形町」となっている。このような地名は、中～近世の武士階級の居館もしくは寺院の所在地に残っていることが多く、今回検出した溝も屋敷地と関わる施設の可能性が高いと考えられる。

最も古い段階の溝は、やや西に振りながら南北方向に走る SD09 である。遺構の切り合いや出土遺物から、13 世紀代の所産と考えられる。北端は SD08 に切られて消滅するが、SD10 以北では確認できないことから、東に屈曲する可能性が考えられる。南端の状況は上部の削平により不明だが、SK23 に切られる位置で東へ曲がると想定すると、南北 26 ～ 30m の区画の存在が推定できる。SD09 と併走する SD08 は、出土遺物から 14 世紀代の所産と思われる。こちらの北端は SD10 に切られ、それ以北では確認できないため、東に屈曲すると考えられる。また、南端は SD05 に切られる位置で消滅することから、ここでやはり東に曲がると想定される。これも南北 25 ～ 28m の区画が仮定できる。この SD09 が埋没し、SD08 が成立する時期は、中世戦記文学『太平記』に記された「大（保）原合戦」の起こった頃と一致しており、戦災とその復旧を考える上で興味深い。こののち、江戸期に入ってから掘削された SD05 は、中世代のものよりやや南に位置するが、同様に南北に走り、北端は東側へ屈曲する。南端は調査区内では確認できておらず、南北 35m 以上の区画が想定できる。SD10 はこれよりさらに後出する溝である。

いずれの遺構についても、今回の調査範囲から性格を判断することは難しい。今後近接地の調査によって、屋敷地の区画であるか否か確定されることを期待したい。

B区では、東西方向の近世以降の溝３条のほかに、7 世紀前半代の竪穴建物跡や 7 ～ 8 世紀にかけての井戸跡数基が検出された。井戸枠等は残存しないが、土層や湧水状況から井戸跡と考えられる SK01・05・07 は、偏った分布を示している可能性が窺われる。SK08 については、詳細は明らかでないが、井戸状の掘り込みになる可能性もある。そうした場合、調査面積は限られているものの、これらの井戸跡の分布は北北東から南南西にかけて一定の軸線上に並ぶ可能性、もしくは井戸跡が集中して掘削される場合、その南東限を示している可能性もある。出土土器から判断できる井戸の掘削から使用時期は SK07（7 世紀初頭）（→ SK08（8 世紀初頭））→ SK05（8 世紀前半）→ SK01（8 世紀後半）と変遷するので、限られた調査ではあるが、使用していた井戸の廃棄と新しい井戸の掘削が順次行われていたことが窺える。これらの集落遺構から周辺には 7 ～ 8 世紀にかけて集落が営まれていることが分かる。

SB01 については、出土土器が小片であり明確な時期を判断できず、建物主軸などからも判断が難しいが、7 ～ 8 世紀の期間に営まれたものではないかと考えたい。集落の南側への広がりはA区の調査例から判断して、同時期の遺構密度は低くなるようなので、集落域の中心はB区周辺の、北側に築地川を望む段丘縁辺に存在するようである。なお、調査面積が限られており、7 ～ 8 世紀代集落域内におけるB区周辺の機能については、今後の課題である。

第1表　A区出土土器観察表①

地区	出土遺構	周辺番号	型式番号	整理番号	器種	法量（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整		備考
A区	SX10	3-1		石炭状遺構-1	上師器脚部	—	橙色	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	指オサエ・ナデ		
	SD04	3-2	図版9	SD04-1	須恵器甕	口径16.1 器高5.6 つまみ径2.8	外：明赤褐色 内：黒褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ→カキメ 内：ナデ		
	SK10	6-1	—	SK10-1	瓦質火鉢	—	外：灰赤色～褐灰色 内：黒褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ハケ		菊花文 宗碧1条
	SK20	6-2	—	SK20-1	瓦質土器	口径（15.0）	外：灰黄褐色～黒褐色 内：灰黄色～褐灰色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ→並タタキ 内：工具ナデ		二段文
	SK23	6-3	—	SK23-3	上師器	口径（7.6） 器高1.1 底径5.1	外：橙色 内：橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK23	6-4	—	SK23-2	上師器	底径（6.3）	外：灰白色 内：浅黄橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK23	6-5	—	SK23-4	瓦質土器	—	外：灰色 内：灰色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：工具ナデ		平行状スタンプ
	SK23	6-6	—	SK23-1	瓦質土器	口径（30.0）	外：灰褐色～明赤褐色 内：暗灰色～明赤褐色	微砂粒を含む	不良	外：タタハケ 内：ナデ		指14本1組 使用による摩滅著しい
	SK23	6-7	—	SK23-5	瓦質土器	—	外：黄灰色 内：黄灰色	微砂粒を含む	良好	外：ハケのち手ナデ調し 内：ナデ		指14本1組 使用による摩滅著しい
	SK25	6-8	—	SK25-1	上師器	—	外：にぶい黄橙色～黒褐色 内：にぶい黄橙色	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	外：ナデ→ヨコハケ 内：ナデ		口縁に粘土突帯 外面に煤付着
	SK26	6-9	—	SK26-1	須恵器	口径（27.8） 器高（10.1） 底径（11.2）	外：灰色 内：灰色	3～6mmの砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		東播系
	SK26	6-10	—	SK26-2	瓦質鍋	口径（17.1） 器高6.6 高台径6.1	外：灰白色～灰色 内：灰白色～灰色	微砂粒を含む	やや不良	外：ヨコミガキ 内：ミガキ		貼付突帯
	SK29	6-11	—	SK29-1	石鍋	口径（16.2）	輪：灰白色	やや粗い、微砂粒を含む	良好	—		12c代
	SK30	9-1	図版9	SK30 下層-1	上師器	口径13.9 器高2.8 底径9.7	外：にぶい橙色～にぶい黄橙色 内：にぶい橙色～黄橙色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK30	9-2	—	SK30 下層-2	上師器	口径（15.7） 器高（2.7） 底径（11.1）	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK30	9-3	—	SK30 下層-5	瓦質皿	口径（9.6） 器高1.8 底径（7.3）	外：灰色 内：灰白色～灰白色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK30	9-4	—	SK30 下層-2	陶器鉢	口径（20.7）	外：灰赤色 内：赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	—		
	SK30	9-5	—	SK30 下層-6	青磁椀	高台径6.1	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	—		碁石の転経を取りなし
	SK30	9-6	図版9	SK30 下層-9	青磁椀	口径（16.5） 器高6.2 高台径（6.7）	胎土：灰白色～にぶい赤色 釉：淡オリーブ色～灰白色	精	良好	—		高台部分は無釉 高台畳部い
	SK30	9-7	図版9	SK30 下層-8	青磁椀	口径（16.8） 器高6.2 高台径6.0	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	—		高台内部に無釉 色調悪い
	SK30	9-8	図版9	SK30 下層-7	青磁椀	口径12.8 器高5.4 高台径4.2	胎土：灰白色 釉：緑灰色	精	良好	—		碁石は転経を取り
	SK30	9-9	—	SK30 下層-11	青磁椀	高台径4.1	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	—		碁石は転経を取り
	SK30	9-10	—	SK30 下層-10	白磁椀	口径（17.8）	胎土：灰白色 釉：灰黄色	精	良好	—		
	SK30	9-11	—	SK30 下層-3	白磁椀	高台径（6.2）	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	高台部分は無釉		同安系
	SK30	9-12	図版9	SK30 下層-8	白磁皿	口径10.0 器高1.9 底径5.6	胎土：灰黄色 釉：灰白色～にぶい橙色	精	良好	—		口縁部輪積を取り
	SK36	11-1	—	SK36-1	瓦質土器	—	外：灰黄色～灰色 内：灰白色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：工具ナデ		
	SK37	11-2	—	SK37-4	青磁皿	底径（7.9）	胎土：灰色 釉：淡オリーブ色	精	良好	外底面中央のみ輪積を取り		同安系
	SK38	11-3	—	SK38-2	白磁椀	口径（17.8）	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	—		
	SD02	12-1	—	SD02 下層 2-1	上師器	—	外：にぶい黄橙色～黒褐色 内：にぶい橙色～黒褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ヨコハケ		貼付突帯 穿孔2箇所
	SD02	12-2	図版9	SD02 下層 4	青磁椀	高台径（5.6）	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	内底面に草花文スタンプ		
	SD02	12-3	—	SD02-4	瓦質鍋	口径（29.8）	外：明灰色～灰白色 内：灰色～灰白色	微砂粒を多く含む	良好	外：ナデ		指1.5本1組 使用による摩滅著しい
	SD02	12-4	—	SD02-5	瓦質土器	口径（28.1）	外：褐灰色 内：暗灰色	微砂粒を多く含む	良好	外：タタハケ 内：不定方向ハケ		
	SD02	12-5	—	SD02 下層 2-3	瓦質鍋	口径（16.1）	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	2mm以下の砂粒を含む	やや不良	外：並タタハケ、胴部ヨコハケ 内：ヨコハケ		
	SD08	13-1	—	SD08 中層 2-3	上師器	口径9.2 器高1.3 底径7.8	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部ヘラ切り		
	SD08	13-2	—	SD08 下層 2-1	上師器	口径（6.6） 器高1.7 底径4.4	外：黒褐色～黒褐色 内：にぶい黄橙色～黒褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SD08	13-3	—	SD08 下層 2-3	上師器	口径（12.8） 器高3.0 底径（8.5）	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色～灰白色	2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SD08	13-4	—	SD08 下層 2-4	上師器	口径9.2 器高1.1 底径7.7	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ→ナデ 底部糸切り→工具ナデ		
	SD08	13-5	—	SD08 下層 2-2	上師器	口径（9.7） 器高1.0 底径（7.9）	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SD08	13-6	—	SD08 中層・下層	上師器	口径（41.8）	外：にぶい橙色～黒褐色 内：にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ→ハケ後ナデ調し 内：工具ナデ		外面に煤付着
	SD08	13-7	—	SD08 上層 1-1	上師器	—	外：灰黄褐色～黒褐色 内：にぶい黄橙色	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	外：ナデ 内：工具ナデ		外面に煤付着
	SD08	13-8	—	SD08 下層 2-2	瓦質火鉢	—	外：灰色 内：灰色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：工具ナデ		2条の突帯
	SD08	13-9	—	SD08 上層 1-6	瓦質土器	口径（15.0）	外：黄灰色～灰色 内：灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ		二段文
	SD08	13-10	—	SD08 下層 2-5	青磁椀	高台径5.8	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色	精	良好	ケズリ出し高台		見込みに花状刻印文
	SD09	13-11	—	SD09-2	上師器	口径（11.5） 器高（3.1） 底径7.0	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	微砂粒を多く含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SD09	13-12	—	SD09-1	上師器	—	外：橙色～にぶい黄橙色 内：にぶい橙色	微砂粒を多く含む	良好	外：ナデ 内：ヨコハケ		口縁部に貼付突帯
	SK02	17-1	写真1	SK02-2	陶器皿	高台径5.4	胎土：灰白色 釉薬：灰黄色	やや粗い、微砂粒を含む	良好	ケズリ出し高台 外底部露胎		見込み砂目4箇所 肥前系 17c初頭～17c半ば
	SK02	17-2	写真1	SK02-1	陶器皿	高台径4.6	胎土：灰白色 釉：暗灰色	精	良好	ケズリ出し高台 外底部露胎		見込み敷の目輪ハギ 肥前系 17c後半～17c末
	SK06	17-3	—	SK06-2	陶器徳利	底径11.8	外：灰白色 内：赤褐色	精	良好	底部糸切り		指14本1組 肥前系 17c後半～17c末
	SK06	17-4	—	SK06-3	陶器徳利	底径10.3	外：にぶい赤褐色 内：暗褐色	精	良好	底部糸切り		肥前系 17c後半～17c末
	SK09	17-5	写真1	SK09-1	染付椀	—	胎土：灰白色	精	良好	—		草花文か? 19c初頭～19c半ば
	SK14	17-6	—	SK14-1	上師器皿	口径7.5 器高1.5 底径4.7	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK14	17-7	—	SK14-2	上師器皿	口径7.6 器高1.6 底径4.6	外：浅黄橙～橙色 内：浅黄橙～橙色	微砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		
	SK14	17-8	—	SK14-3	瓦質鍋	底径（29.8）	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	3～7mmの砂粒を含む	良好	外：タタキ? 内：ハケ		
	SK19	17-9	写真1	SK19-1	染付椀	口径（11.4）	—	精	良好	—		梅花文か?一部赤絵を施す
	SK28	17-10	—	SK28-1	上師器	—	外：黒色 内：にぶい赤色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部糸切り		口縁に貼付突帯 外面に煤付着
	SK28	17-11	—	SK28-3	陶器皿	口径（14.6）	胎土：灰黄褐色 釉：灰黄褐色～黄白色	精	良好	—		唐津系 17c半ば～17c末
	SK33	17-12	—	SK33-5	陶器鉢	—	外：暗赤褐色 内：暗赤褐色	1～3種類の小粗粒の砂粒	良好	口縁部の外面に煤付着		肥前系 17c後半～17c末
	SK33	17-13	—	SK33-6	赤絵椀	高台径4.8	胎土：灰白色 釉：灰白色～赤色	精	良好	—		碁石は転経を取り
	SD01	19-1	—	SD01-1	陶器皿	口径（34.0）	外：明赤褐色 内：明赤褐色	精	良好	—		肥前系
	SD01	19-2	—	SD01-2	染付椀	口径（8.0） 器高4.1 高台径（3.2）	胎土：灰白色 釉：灰白色～緑灰色	精	良好	—		碁石は転経を取り 草花文か? 発色不良
	SD01	19-3	—	SD01 上層 3	染付椀	口径（10.0） 器高4.9 高台径（4.5）	胎土：灰白色 釉：灰白色～濃緑	精	良好	—		碁石は転経を取り 梅菊花文か? 発色不良
	SD01	19-4	—	SD01-6	不明瓦質製品	長5.3 幅1.5 重量10.4	胎土：灰白色 釉：灰白色	精	良好	—		
	SD01	19-5	—	SD01-5	不明瓦質製品	長5.2 幅1.45 重量9.0	胎土：灰白色 釉：明緑青色	精	良好	—		
	SD05	19-6	—	SD05 ③-1	上師器	—	外：橙色 内：橙色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ナデ 底部ヘラ切り		
	SD05	19-7	—	SD05 ①-17	陶器皿	—	胎土：明赤褐色～にぶい褐色 釉：灰黄褐色	微砂粒を含む	良好	—		高台部分は無釉 唐津系 鉄絵草花文か?
	SD05	19-8	—	SD05 ②-5	上師器	—	外：黒褐色～黒色 内：橙色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ハケのちナデ調し 内：工具ナデ		口縁部に貼付突帯
	SD05	19-9	—	SD05 ③-2	瓦質火鉢	口径（30.4）	外：にぶい黄橙色～黒褐色 内：褐灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：ナデ 内：ヨコハケ		指4サエ・ナデによる貼付跡
	SD05	19-10	—	SD05 ①-14	陶器系不明製品	底径10.8	外：明赤褐色～にぶい黄橙色 内：にぶい黄色	微砂粒を含む	良好	—		指4サエ・ナデによる貼付跡
	SD10	19-11	写真2	SD10 ①-37	陶器皿	高台径4.8	胎土：灰白色 釉：オリーブ色～緑灰色	精	良好	ケズリ出し高台		見込み敷の目輪ハギ 高台部分はまだらに釉が残る
	SD10	19-12	写真2	SD10 ①-28	陶器皿 碗	高台径4.6	胎土：灰白色 釉：オリーブ色	精	良好	ケズリ出し高台		見込み敷の目輪ハギ 碁石は転経を取り
	SD10	19-13	写真2	SD10 ①-32	陶器皿	高台径4.8	胎土：にぶい褐色 釉：灰白色	精	良好	ケズリ出し高台		見込み敷の目輪ハギ 高台部分は無釉 肥前系
	SD10	19-14	写真3	SD10 ①-38	染付皿	高台径（8.0）	胎土：灰白色 釉：乳白色～青灰色	精	良好	—		碁石は転経を取り コンニャク印刷 見込み敷の目輪ハギ

第2表　A区出土土器観察表②

地区	出土遺構	挿図番号	図版番号	整理番号	器種	法量（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
A区	SD10	19-15	写真2	SD10-② -35	陶器皿	高台径（12.0）	軸上：にぶい黄橙色　軸：灰白色＋緑灰色	精良	良好	ケズリ出し高台	瑞浪窯系陶器に属
	SD10	19-16	—	SD10-② -6	陶器皿		軸上：にぶい黄橙色　軸：黒褐色＋灰褐色	精良	良好	—	口縁部に重ね焼きの砂粒痕　瑞浪系　17c 後半
	SD10	19-17	—	SD10-② -17	陶器灯明皿	口径（5.4）　胴高 2.6　底径 4.0	軸上：暗赤褐色　胴部：黒色	精良	良好	底部糸切り	
	SD10	19-18	—	SD10-② -10	陶器擂鉢	底径（11.8）	外：赤褐色　内：暗赤褐色	精良	良好	底部糸切り	須田 12 条 1 期　17c 後半
	SD10	19-19	—	SD10-② -11	陶器擂鉢	底径（15.0）	軸上：橙色＋明赤褐色　軸：褐褐色	やや粗い	良好	—	須田は無釉系取り　瑞浪系　18c 後半
	SD10	19-20	—	SD10-② -8	陶器擂鉢	—	外：暗褐色＋赤褐色　内：暗褐色＋赤褐色	精良	良好	—	口縁部は折り返し成形
	SD10	19-21	図版9	SD10-② -5	陶器皿	口径（17.2）　胴高 14.1　高台径 9.3	軸上：明赤褐色　軸：黒褐色＋暗赤褐色	3mm 以下の砂粒を含む	良好	—	高台部分は無釉　瑞浪系　17c 後半
	SD10	19-22	—	SD10-26	陶器碗	高台径 4.2	軸上：にぶい褐色＋灰白色　軸：黒色＋暗灰黄色	精良	良好	ケズリ出し高台	高台部分は無釉
	SD10	19-23	写真2	SD10-② -22	陶器碗	高台径 3.3	軸上：灰白色　軸：にぶい黄橙色	精良	良好	ケズリ出し高台	碗台は無釉系取り　京風窯系陶器か
	SD10	19-24	写真3	SD10-23	染付皿	高台径 4.4	軸上：にぶい黄橙色　軸：明オリーブ灰色	精良	良好	—	見込みにトチン跡　碗台は無釉系取り　18c 後半
	SD10	19-25	写真3	SD10-② -33	染付皿	口径（8.0）　胴高 2.2　高台径 4.2	軸上：灰白色　軸：明白色	精良	良好	型押し	見込みにトチン跡 3 箇所　碗台は不十分な無釉系取り
	SD10	19-26	写真3	SD10-② -29	染付皿	口径（13.0）　胴高 3.0　高台径 7.8	軸上：灰白色　軸：明黄灰色＋緑色	精良	良好	型押し	見込みに手彫り蕨手　外面素焼の目ケズリ　17c 後半～18c 前
	SD11	19-27	—	SD11-4	上師器鍋	—	外：暗褐色　内：暗褐色＋褐色	3mm 以下の砂粒を含む	良好	内：ナデ　内：ヨコハケ	口縁部に粘付突帯

第3表　B区出土土器観察表

地区	出土遺構	挿図番号	図版番号	整理番号	器種	法量（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
B区	SD11層	23-1	—	SC01-5	須恵系陶器		外：褐灰色　内：灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	
	SD11層	23-2	—	SC01-8	須恵系陶器	口径（10.0）　胴高（3.8）	外：灰色　内：灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	
	SD11層	23-3	—	SC01-9	須恵系陶器	口径（9.2）　受け部径（11.6）　底径（6.4）	外：灰色＋黒色　内：灰色＋暗灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	底部にヘラ記号あり
	SD11層	23-4	—	SC01-1	須恵系陶器		外：灰色＋淡黄褐色　内：にぶい黄橙色	4mm以下の砂粒を含む	良好	内：ナデ　外：ナデ	生焼け
	SD11層	23-5	—	SC01-2	上師器		外：橙色　内：橙色	微砂粒を含む	良好	横撫により調整不明	
	SD11層	23-6	—	SC01-3	上師器		外：明赤褐色　内：暗赤褐色＋にぶい褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：横ナデ　外：横ナデ	糸切り　中世遺物の混入
	SD11層	23-7	図版10	SC01-3	上師器	口径（11.3）	外：橙色　内：橙色	微砂粒を含む＋mica がみられる	良好	口：横ナデ　外：横撫　内：ナデ	
	SD11層	23-8	—	SC01-2	上師器	高台径（9.2）	外：橙色　内：橙色	微砂粒を含む＋mica がみられる	良好	内：横ナデ　外：横ナデ	
	SD11層	23-9	—	SC01-1	上師器	高台径（9.2）	外：橙色　内：にぶい黄橙色＋黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	口：横ナデ　外：ハケ　内：ケズリ	
	SD11層	28-1	—	SA01-7	須恵系陶器	つまみ径（1.7）	外：灰色　内：灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	内：ナデ　外：回転ナデ	
	SD11層	28-2	—	SA01-2	上師器鍋		外：にぶい橙色　内：浅黄橙色	微砂粒を含む	良好	横撫により調整不明　回転ナデか	
	SD11層	28-3	—	SA01-1	上師器鍋		外：橙色　内：橙色	4mm以下の砂粒を含む	良好	口：横ナデ	
	SD11層	28-4	—	SA01-4	石鍋鍋		軸上：灰白色　軸：灰白色	精良　微砂粒を含む	良好	横撫	
	SD11層	28-5	—	SA01-4	須恵上師鍋	高台径（7.2）	外：黒色　内：黒色	微砂粒を含む	良好	内：ミガキ　底外：ナデ	
	SD11層	28-6	—	SA01-3	黒色土師器	高台径（7.4）	外：黒色　内：黒色	微砂粒を含む	良好	内：ミガキ　外：ミガキ	
	SK04	28-7	—	SA04-1	上師器皿	口径（13.3）	外：橙色　内：橙色	微砂粒を含む	良好	内：ナデ　外：横ナデ＋ヘラケズリ	
	SK04	28-8	—	SA04-1	上師器皿		外：にぶい橙色　内：橙色	2mm以下の砂粒を含む	良好	内：ミガキ＋ナデ　外：ミガキ＋ハケ状調整	
	SK05層	28-9	図版10	SK05-10	須恵器甕	底径（9.7）	外：暗紫灰色＋灰色　内：灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ	
	SD11層	28-10	—	SK05-10	須恵系陶器		外：褐灰色　内：灰色	4mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ＋ヘラケズリ　外：回転ナデ＋ヘラケズリ	底面にヘラ記号の示唆（69.×23cm）が付着
	SK05層	28-11	図版10	SK05-2	上師器皿	口径（17.9）	外：にぶい橙色＋褐色　内：にぶい橙色	2mm以下の砂粒　微砂粒	良好	内：ナデ　外：ナデ　ヘラケズリ　口：横ナデ	
	SK05層	28-12	—	SK05-1	上師器皿	口径（15.5）	外：明赤褐色　内：にぶい橙色	4mm以下の砂粒　微砂粒を多く含む	良好	内：ヘラケズリ　口：ハケ　口：横ナデ	
	SD11層	28-13	図版10	SK05-1	上師器鍋	口径（30.4）　胴高（16.8）	外：明赤褐色＋にぶい黄橙　内：明赤褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	内：ヘラケズリ　外：上位ナデ　口：横ナデ	
	SD11層	28-14	—	SK07-7	須恵系陶器	口径（19.6）　胴高（2.7）　受部径（11.0）	外：灰色　内：灰色	微砂粒を多く含む　粗い	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋ヘラケズリ	
	SD11層	28-15	—	SK07-8	須恵系陶器		外：灰色　内：灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ	
	SD11層	28-16	—	SK07-6	須恵系陶器		外：灰色　内：灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	
	SD11層	28-17	—	SK07-3	須恵系陶器		外：灰色　内：灰色	4mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ	
	SD11層	28-18	—	SK07-11	須恵系陶器		外：灰色　内：灰色	微砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ	
	SD11層	28-19	—	SK07-1	上師器鍋		外：明赤褐色　内：明赤褐色＋黒灰色	微砂粒＋3mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：ヘラケズリ　外：ミガキ　口：横ナデ	
	SD11層	28-20	—	SK07-2	上師器鍋		外：にぶい黄橙色＋黒色　内：明赤褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：ヘラケズリ　外：ハケ＋ナデ	底面に黒斑あり
	SK08	28-21	—	SK08-1	上師器鍋		外：橙色　内：橙色	微砂粒＋4mm以下の砂粒	良好	内：ヘラケズリ　外：ハケ後ナデ　口：横ナデ	
	SD04	28-22	—	SD04-3	須恵系陶器	口径（15.5）	外：灰色　内：灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	内面：当て具痕残る
	SD04	28-23	—	SD04-1	上師器鍋		外：にぶい橙色　内：明赤褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：ミガキ＋ナデ　外：ヘラケズリ　口：横ナデ	
	SD11層	30-1	図版10	SD02-33	須恵系陶器	口径（22.0）　胴高（9.6）　高台径（11.7）	軸上：にぶい黄橙色＋にぶい褐色　軸：暗褐色	精良　微砂粒を含む	良好	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　口縁部から胴部中位に掛け流釉	須田 22 条一期、江口 1 編類から 3.7cm 集り出し
	SD11層	30-2	図版10	SD02-35	須恵系土師	口径（20.0）　胴高（19.0）　高台径（14.6）	軸上：にぶい黄橙色＋にぶい褐色　軸：暗褐色＋赤色	精良　微砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋回転ヘラケズリ	口縁部は折り返し成形　高台部分は無釉
	SD11層	30-3	図版10	SD02-34	上師器土師	口径（15.0）	外：にぶい黄橙色　内：橙色	3mm以下の砂粒　微砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：ナデ	口縁部は折り返し成形　高台部分は無釉
	SD11層	30-4	図版10	SD02-32	須恵系土師	口径（14.0）　胴高（27.5）　底径（9.8）	軸上：黒褐色＋灰色　軸：暗褐色　灰色、オリーブ褐色	精良	良好	口縁部～胴部と胴部と輪の接触部間なる	胴部3方向に「中西「花」「●」「第4号」の文字
	溝遺構	30-6	—	SD03-2	須恵系	高台径（4.4）	軸上：にぶい褐色　軸：浅黄橙色	微砂粒を含む	良好	ケズリ出し高台	見込み及び周囲ハケ　高台部分は無釉
	P23	31-1	—	P23-1	陶器土師器		外：にぶい褐色＋にぶい黄橙色　内：にぶい褐色	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：指オサエ　ナデ　口：横ナデ	口縁部に粘付突帯　口縁部は不明
	P26	31-2	—	P26-1	陶器土師器		外：にぶい黄橙色　内：明黄褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：横方向ミガキ　口：横ナデ	口縁部に粘付突帯
	P06	31-3	—	P06-1	上師器鍋		外：にぶい黄橙色　内：にぶい黄橙色＋褐灰色	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	内：ケズリ　外：ハケ後ナデ　口：横ナデ	
	P11	31-4	—	P11-1	須恵系陶器	口径（10.9）	外：橙色＋淡黄褐色　内：橙色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：横撫	
	P05	31-5	—	P05-1	須恵系陶器		外：にぶい橙色　内：橙色	微砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋ヘラケズリ後ナデ	
	P12	31-6	図版10	P12-1	須恵系陶器	口径（23.8）	外：灰色＋灰白色　内：灰色＋灰白色	3mm以下の砂粒を含む	良好	内：回転ナデ　外：回転ナデ＋タタキ	

第4表　出土石器観察表

地区	出土遺構	挿図番号	図版番号	整理番号	器種	石材	長さ	幅	高さ	重量	備考
A区	SD05	20-1	図版9	SD05-ｽｸｲ-1	紡石	流紋岩	6.7	4.8	2.4	97.5	穿孔あり　現辺部が赤変
	SK06	20-2	図版9	SK06-ｲ-1	紡石	流紋岩	12.5	6.9	5.4	671	
	SD10	20-3	図版9	SD10-ｽｲ-2	紡石	片岩系	10.8	3.45	2.8	185	
	SP06	20-4	図版9	SP06-ｲ-1	石錘	安山岩	27.0	21.6	9.1	—	側面に敲打痕の凹み痕
B区	SD2 層	30 - 5	図版10	SD02-ｲ-1	剣	赤頁岩	16.2	7.2	2.2	494	表面剥落が激しく黒が一部現存、裏面に「赤頁岩」と観別
	SD1 層	—	—	SD01-ｲ-1	紡石	安山	17.6	6.2	2.6	1650	紡錘 4 面現存
	SD7 層	—	—	SD07-ｲ-1	紡石	安山	19.0	7.4	1.1	1100	紡錘 4 面現存
	P29	—	—	P29-ｲ-1	紡石	結晶片岩	(8.0)	(7.0)	(1.4)	94.5	紡錘 3 面現存

A 区調査区全景（北から）

図版2

① SK01 完掘状況（南から）

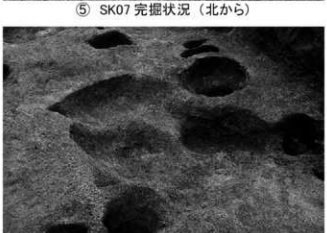
② SK02 完掘状況（南から）

③ SK03 完掘状況（南西から）

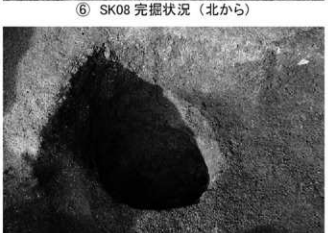
④ SK06 完掘状況（西から）

⑤ SK07 完掘状況（北から）

⑥ SK08 完掘状況（北から）



⑦ SK09 完掘状況（北東から）



⑧ SK15 完掘状況（南から）

① SK17 完掘状況（南から）

② SK20 完掘状況（南から）

③ SK21・22 完掘状況（南西から）

④ SK23 完掘状況（北東から）

⑤ SK27 完掘状況（北東から）

⑥ SK29・37・38 完掘状況（南から）

⑦ SK30 完掘状況（西から）

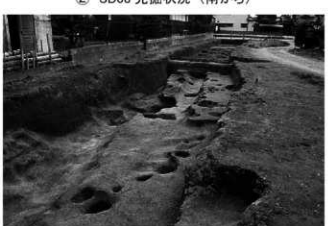
⑧ SK35 完掘状況（西から）

図版4

① SD04 完掘状況（西から）

② SD08 完掘状況（南から）

③ SD05 完掘状況（南から）



④ SD09 完掘状況（北から）

⑤ SD10 東壁土層（南西から）

⑥ SD10 木杭検出状況（南から）

① B区全景
（南東から）

② B区全景
（西から）

③ B区北全景
（北西から）

図版6

① B 区 SC01 土層断面（北西から）

② B 区 SC01 床面検出状況（南西から）

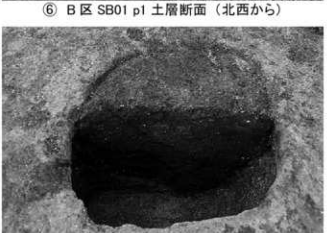
③ B 区 SC01 カマド検出状況（北から）

④ B 区 SC01 貼床除去後（南西から）

⑤ B 区 SB01（北西から）

⑥ B 区 SB01 p1 土層断面（北西から）

⑦ B 区 SB01 p3 土層断面（北東から）



⑧ B 区 SB01 p4 土層断面（東から）

① B 区 SB01 p5 土層断面（東から）

② B 区 SK01 土層断面（南から）

③ B 区 SK01 完掘状況（東から）

④ B 区 SK01 完掘状況（南から）

⑤ B 区 SK02 土層断面（東から）

⑥ B 区 SK02 完掘状況（東から）

⑦ B 区 SK03 土層断面（北から）

⑧ B 区 SK04 土層断面（西から）

図版8

① B 区 SK04 完掘状況（西から）

② B 区 SK05 土層断面（北から）

③ B 区 SK05 完掘状況（北から）

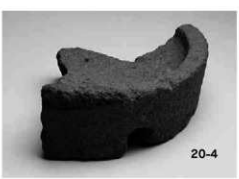
④ B 区 SK07 土層断面（北から）

⑤ B 区 SK07 完掘状況（北から）

⑥ B 区 SD02 土層断面（東から）

⑦ B 区 SD03 土層断面（東から）

⑧ B 区調査風景



A区出土遺物

図版 10

22-7

28-9

28-13

28-11

31-6

P29

30-1

30-2

30-3

30-4

30-5

B 区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	こいたいやしきいせき2
書名	小板井屋敷遺跡2
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 253 集
編著者名	上田 恵 山崎頼人
編集機関	小郡市教育委員会文化財課 小郡市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL 0942-75-7555 FAX 0942-75-2777
発行年月日	平成 23（2011）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
こいたいやしき 小板井屋敷遺跡2	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 こいたい 小板井 1-8、 1-11～ 16 ほか	40216		33° 23′ 39″	130° 33′ 37″	20100112 ～ 20100326	600 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小板井屋敷遺跡2	集落	飛鳥・奈良 鎌倉～室町 江戸	竪穴建物・井戸 土坑・溝 土坑・溝	土師器・須恵器・石器 土師器・須恵器・陶磁器・石器 土師器・陶磁器・石器	

要約	小板井屋敷遺跡2は、宝満川西岸の低台地縁辺に所在し、現況での標高は 12m 前後である。北側に段丘崖が残り、築地川を臨む。遺跡の時期は、奈良・鎌倉・江戸の3期に大分される。奈良時代の集落は調査区北部にほぼ限定されており、段丘縁辺に展開していたと考えられる。中世～近世の遺構は、調査区南部に集中している。本遺跡の小字名は「屋敷」「神屋敷」であり、周辺には寺院が所在したという伝承も残っていることから、今回検出した溝は屋敷地もしくは寺城の区画である可能性も考えられる。

小板井屋敷遺跡２

小郡市文化財調査報告書第 253 集

平成 23（2011）年 3 月 31 日

発行　小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡 255-1

印刷　アーネスト

福岡県小郡市小郡 845-3